

福井県立大学恐竜学部設置の趣旨等について

目次

第1 設置の趣旨及び必要性	p. 5
1 福井県立大学の沿革と恐竜学部開設の社会的背景	p. 5
2 恐竜学部の必要性	p. 6
(1) 地域特性を活かした学部づくり	p. 6
(2) 恐竜研究の継続と発展の確保	p. 7
(3) 地盤災害や防災等を学ぶ学部の必要性	p. 7
(4) デジタル科学の活用と産業への応用	p. 8
3 養成する人材像	p. 9
4 ディプロマポリシー（学位授与の方針）	p. 9
5 アドミッションポリシー（入学者受入れの方針）	p. 10
6 カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）	p. 10
第2 学部の特色	p. 11
1 恐竜博物館との教育・研究体制	p. 11
2 現場主義 —フィールド科学の実践— の推進	p. 11
3 国際的視野に立つ教育・研究	p. 12
4 デジタル技術を活用した新分野の展開	p. 12
5 地域振興や新産業創出のための産学官協力関係の構築	p. 12
6 高大連携の推進	p. 13
第3 学部の名称及び学位の名称	p. 14
第4 教育課程の編成の考え方及び特色	p. 15
1 カリキュラムポリシーについて	p. 15
2 教育課程編成の基本方針とその体系性について	p. 15
(1) 科目区分の設定	p. 15
(2) 主要授業科目について	p. 20
(3) 単位時間数について	p. 20
(4) 1年間の授業期間及び各授業科目の授業期間について	p. 20
第5 教育方法、履修指導方法及び卒業要件	p. 21
1 教育方法	p. 21
(1) 授業形式・学生数設定	p. 21
(2) 履修モデル・配当年次	p. 21
(3) ティーチング・アシスタント（TA）制度	p. 22
(4) オフィスアワーの設定	p. 23
(5) デジタル化による教育・研究推進	p. 23
(6) 学生の福利・厚生に対する配慮	p. 23

(7) 単位互換制度	p. 23
(8) 留学生の入学について	p. 23
2 履修指導方法及び卒業要件	p. 24
(1) 履修指導方法	p. 24
(2) 成績評価	p. 24
(3) 卒業要件	p. 25
第 6 実習の具体的計画	p. 26
1 実習の目的	p. 26
2 実習先の確保の状況	p. 26
3 実習先との契約内容	p. 26
4 実習水準の確保の方策	p. 26
5 実習先との連携体制	p. 26
6 実習前の準備状況（感染予防対策・保険等の加入状況）	p. 26
7 事前・事後における指導計画	p. 27
8 教員及び助手の配置並びに巡回指導計画	p. 27
9 実習施設における指導者の配置計画	p. 27
10 成績評価体制及び単位認定方法	p. 28
第 7 企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画	p. 29
1 恐竜発掘実習	p. 29
(1) 実習先の確保及び実習の流れ	p. 29
(2) 指導・サポート体制	p. 29
(3) 事前・事後学修	p. 29
(4) 成績評価及び単位認定方法	p. 30
2 博物館実習	p. 30
第 8 取得可能な資格	p. 31
第 9 入学者選抜の概要	
1 アドミッションポリシー	p. 32
2 入試方法の区分と募集人員	p. 32
(1) 入試方法の区分	p. 32
(2) 募集人員	p. 32
3 選抜方法	p. 32
(1) 一般選抜（前期・後期）	p. 33
(2) 学校推薦型選抜	p. 33
(3) 総合型選抜	p. 34

(4) 留学生や社会人等を対象とした特別選抜について	p. 34
4 各選抜方法と「学力の3要素」、「アドミッションポリシー」との関連性	p. 34
5 入学試験実施体制	p. 35
6 科目等履修生・聴講生	p. 36
第10 教育研究実施組織等の編制の考え方及び特色	p. 37
1 教員組織の編成の基本的な考え方	p. 37
2 教員配置（職位・学位・担当科目）	p. 37
3 年齢構成	p. 37
4 教育研究実施組織等について	p. 38
第11 研究の実施についての考え方、体制、取組	p. 39
第12 施設、設備等の整備計画	p. 40
1 校地、運動場の整備計画	p. 40
2 校舎等施設の整備計画	p. 40
3 図書等の資料及び図書館の整備計画	p. 42
第13 2以上の校地において教育研究を行う場合の具体的計画	p. 44
1 基幹教員の配置	p. 44
2 教員の移動への配慮	p. 44
3 学生への配慮	p. 44
4 施設設備等の配慮	p. 44
第14 管理運営	p. 45
1 目的	p. 45
2 本学部の組織	p. 46
3 恐竜学部教授会	p. 46
第15 自己点検・評価	p. 47
1 実施体制・実施方法	p. 47
2 結果の活用・公表	p. 47
第16 情報の公表	p. 48
1 情報提供の方法	p. 48
2 情報提供の内容及びホームページアドレス	p. 48
第17 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等	p. 50
1 FDの取組	p. 50
(1) 学生による授業評価	p. 50
(2) 研修	p. 50
(3) 教学IR (Institutional Research)	p. 50

2	SDの取組	p. 50
3	その他の取組	p. 51
(1)	教職員の倫理保持	p. 51
(2)	教員評価	p. 51
第 18	社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	p. 52
1	教育課程内の取り組み	p. 52
2	教育課程外の取り組み	p. 52
3	適切な体制の整備	p. 52

第1 設置の趣旨及び必要性

1 福井県立大学の沿革と恐竜学部開設の社会的背景

本学は、1920年に設置された福井県農業試験場内の福井県農業技術員養成課程に始まり、1966年の福井県農業短期大学校への改称、1975年の福井県立短期大学としての開学を経て、1992年に経済学部、生物資源学部をもつ福井県立大学として開学した。現在では4学部（経済学部、生物資源学部、海洋生物資源学部、看護福祉学部）、2研究所（地域経済研究所、恐竜学研究所）と4研究科（経済・経営学研究科〔修士・博士〕、生物資源学研究科〔修士・博士〕、看護福祉学研究科〔修士〕、健康生活科学研究科〔博士〕）をもつ総合大学となった。

開学以来、本学は、時代の発展に即応した学術文化の高度化を推進する拠点として、福井県はもとより、我が国の産業と文化の発展に寄与し、人類の永続的福祉の向上に貢献することを使命としてきた。その使命達成のため、真理探究の精神、広い視野と豊かな創造力、高度で専門的な知識・技術を有する有為な人材を養成するとともに、先進的な科学の研究および技術の開発を行い、学術情報を地域社会へ発信してきた。

しかし、福井県も他県と同様に、全国的な人口減と高齢化の進行に加え、大学進学時と卒業後の就職時における大都市圏への若年層の転出が大きな課題となっている。そのため、県内大学等の高等教育環境の選択性の拡充と質的向上、魅力ある学びの場を提供し、福井県の発展に必要な人材を育成・確保することが重要である。

この現状の中、時代に即した魅力ある学部を作るなど、18歳人口を集約して福井県の持続可能性を支えることは、重要な命題となっている。その命題を解決するために、「福井県立大学」の存在感を示すことが、全国におよそ100ある公立大学の中で、志の高い学生を集める大きな旗印となる。加えて、子供から高齢者まですべての県民に対して生涯学習の機会を提供し、地域の活性化に寄与することも本学が担うべき重要な使命として期待されている。

本学は、メインキャンパスである「永平寺キャンパス（福井県永平寺町）」に経済学部（経済学科、経営学科）、生物資源学部（生物資源学科）、看護福祉学部（看護学科、社会福祉学科）、「小浜キャンパス（小浜市）」に海洋生物資源学部（海洋生物資源学科）を設置してきた。令和2年4月には新たに生物資源学部創造農学科を「あわらキャンパス（あわら市）」に開設、さらに令和4年4月に海洋生物資源学部先端増養殖科学科を「かつみキャンパス（小浜市）」に開設した。こうして、県内全域にキャンパスを配置することで、公開講座や企業等との連携を通じて、大学の学術研究資源を地域に還元する環境を整えている。また、地域・社会とのつながりを重視し、地域の教育力の活用や県内の施設等を学生の実習の場とする全県キャンパス化を進めている。

こうした中、本学では、開学から第2クォーターとなる25年間を迎えた第3期中期計画〔2019年度～2024年度〕において、福井県の特徴を活かした人材育成の方向性を明らかにし、「福井の元気・持続可能性を支える大学」を目指す方向性を示してきた。その1つとして、「恐竜学」の世界的学術拠点となる古生物学関係新学部の開設を構想してきた。

一方、現在の急激な温暖化の進行とともに多くの自然環境や生態系が激変し、これまで災害が起きるはずのなかった地域でも温暖化の進行により、土砂災害や洪水などの災害が頻発している。このような状況において、恐竜学を含む自然科学は自然の営みを明らかにする重要な分野となっている。地震・火山などの災害、台風やモンスーン気候による気象災害を頻繁に受ける我が国においては、自然科学における知識は必要不可欠のリテラシーである。特に、恐竜の住んでいた白亜紀の時代は温暖化がピークに達した時代であり、そのときの環境や生態系は、地球の未来に起こる姿を明らかにしてくれる題材でもある。

このような背景から、新学部を開設し、県立恐竜博物館および本学恐竜学研究所の学術成果等を基に、地質学や古環境学、古気候学なども加えた上で、地球の気候変動や自然災害に関する基礎や応用の研究を行い、幅広い産業への人材の輩出や、恐竜資源を活用した地域活性化やブランド力向上に資するとともに、全国で他にはない個性ある大学を目指す。

(参考資料：①「公立大学法人福井県立大学定款」、②「福井県立大学学則(案)」、③「福井県立大学履修規程」、④「公立大学法人福井県立大学組織図(案)」、⑤「公立大学法人福井県立大学の組織および運営に関する基本規程(案)」、⑥「公立大学法人福井県立大学 第3期中期計画」)

2 恐竜学部の必要性

(1) 地域特性を活かした学部づくり

本学では、生物・生命科学系学部として、生物資源学部および海洋生物資源学部が設置されている。これらは福井県の主要産業の一つである農業および水産業の振興と強く結びついており、生物資源学部では機能性食品や新品種の開発、環境浄化技術などの開発を行うとともに、これらを推進する人材の育成を行っている。一方、海洋生物資源学部は日本海側で有数の水産・海洋系の学部で、海洋生物資源の持続的な利用を目指して、海洋生物資源の利用・加工や消費流通に関する教育・研究に取り組んでいる。

これら生物・生命科学に関する教育・研究の蓄積に加えて、福井県が全国に先駆けて発掘・研究を行ってきた「恐竜」に関しても、恐竜をはじめとする古生物や地質に関連する研究を持続的発展することができる人材を育成し、これらを活用した新しい産業創出に寄与することが大学に強く求められてきた。

福井県は、30年以上にわたり恐竜化石の発掘・研究を進めてきており、学術的に重要な脊椎動物化石を継続的に多数発見してきた唯一の県である。恐竜研究では福井県は先進地であり、福井県立恐竜博物館が開館した2000年以来、世界有数の恐竜博物館として認識され、全国的に「福井＝恐竜」と認知度を上げてきている。近年、日本各地から恐竜化石の報告がなされているが、我が国において学名がついている11体のうち6体が福井県で発見され、学術的な成果は群を抜いている。また、白亜紀ワニ類化石のほぼ完全に近い骨格や日本初の白亜紀鳥類化石の完全骨格も発掘するなど、恐竜化石以外にも多くの成果を上げている。

さらに福井県は、恐竜化石以外でも4億年以上前の温暖な海を示す古生代のサンゴ化石や三葉虫、中生代のワニやカメ化石など豊富な脊椎動物相を示す化石群、そして、東尋坊などにみられる新生代の日本海形成時の火山活動、7万年の時を記録する水月湖の年縞など、悠久の日本列島史を記録している数少ない場所である。特に、前述の恐竜に加えて、福井県の代表的な地質遺産として、三方五湖の一つ水月湖の「年縞」がある。この「年縞」は、チバニアンとともに、地質年代の世界標準として認定されているきわめて重要な堆積物であり、福井県里山里海湖研究所と年縞博物館では花粉分析によって当時の古気候の解明にも成果を上げている。このような自然科学分野における研究成果は、地球温暖化などの環境問題の解決にも適用でき、地域だけでなくグローバルな問題に対しても活用することができる。

以上のように、我が国の恐竜研究をリードしてきた恐竜化石発掘調査の成果や、手取層群、水月湖の年縞、東尋坊など、福井県のもつ古生物・地質に関する資源のさらなる活用を進展させることが、本学の重要な役割である。

また、現在の日本の科学技術・イノベーション政策において、IT化やDX化の基本方針が提案されている。その背景には、人口減少に対する労働効率化と社会の持続性があり、解決策としてデジタル技術やAIを活用したイノベーションが求められている。一方、福井県では野外の自然を対象とする土木・建設、環境調査などの分野でのデジタル化の遅れと人材不足は顕著で、今後の県内のインフラ整備等にも影響が出てくることが危惧されている。

本学部では、これまで福井の恐竜研究が行ってきた古生物・地質の研究成果と手法を用いて、研究者

などに加え、これらの自然を対象とする産業の人材育成を行う。また、恐竜化石や福井の地質景観は観光資源として活用され、観光産業を支える一助ともなっており、関連する企業へ人材を輩出することもできる。特に、野外で恐竜化石を発掘している強みを生かし、野外での仕事の魅力や重要性を伝えることで、野外を対象とする産業に就きたいという若い世代の県内定着や UI ターンの拡大を目指すことができる。

(2) 恐竜研究の継続と発展の確保

このような背景から、福井県内全域に広がるフィールドを活かし、恐竜をはじめとした古生物学、地質学、年縞などの古気候学・古環境学を合わせて教育・研究できる本学部を設置する意義は、きわめて大きいといえる。本学部設置にあたっては、これまで福井県立恐竜博物館、本学恐竜学研究所が培ってきた世界との恐竜研究ネットワークをさらに強化し、その背景となる地質学や古環境学、デジタル技術の成果を加えることで、さらなる教育・研究の発展を目指している。また、従来のような恐竜研究に加えて、本学が既に強みとして持っている植物学のような現生生物学や解剖学などの最新の知見や研究成果を加えるとともに、化学元素を用いた新しい環境指標の使用など、最新の分析技術を取り入れて、恐竜世界の復元やその生態を明らかにする、これまでにない「新しい恐竜学」へと発展させることも目的としている。これらにより、本学は我が国の公立大学におけるオンリーワンの大学となり、併せて福井県のブランド力の強化に寄与できることから、地域の要請にも十分に応えることができる。また、全国的にみても、恐竜やその関連科目を中心に研究・人材育成を行う学部の設立は初めてであり、恐竜研究や関連領域への展開を担う人材を育成する機関として役割を果たしていく。

(3) 地盤災害や防災等を学ぶ学部の必要性

日本は地殻の変動帯に位置し、モンスーン気候下にあるため、毎年、自然災害により多くの被害が出ている。東日本大震災などの巨大地震の被害は、第5期科学技術基本計画にも取り上げられている。同計画で提案された Society 5.0 では、国土の強靱化、自然との共生、SDGsなどを重視しており、日本のような災害が頻発する国こそが自然と社会活動をどのように共存させていくかのモデルケースなると指摘している。

福井県の自然は、観光等で社会的にも活用されている一方で、活断層や豪雪などの自然災害のリスクを抱えており山岳地帯では地滑り等の災害も多い。しかし、福井県内の大学には地球科学系の学部はなく、地質や災害に関して学ぶ場所がほとんどない。本学でも植物や海洋生物に関する講義は基礎教育で行われてきたが、過去の地球環境の変遷などの地質学の講義はほとんどなく、現在の温暖化問題に関する講義も少ない。

本学部では、恐竜をはじめとする古生物学に不可欠な地質学を学ぶ必要性があることから、地震、豪雨災害、地滑りなど、生活に大きな影響を与える地盤災害に対しても、減災、防災に関する知識を身につけるための教育を行い、現代社会の自然科学の諸問題に対応できる人材を育成することができる。

また、温暖化問題を考察する上では、過去の気候変動を読み解くことが必要であり、実際に気候変動に関する政府間パネル (IPCC) でも約 5500 万年前の始新世のデータや 300 万年前の鮮新世のデータが、未来の温暖化時の地表の環境変化の推定などに活用されている。恐竜の生態を解析するためには、古環境学の学修が必須であり、古環境の教育を通じて未来の地球温暖化対策に対応できる人材も育成できる。

本学部では、上記のような地質学や古気候学・古環境学に関する事項を学ぶことができる。ここで学んだ専門知識や技術は土木・建設分野などの地盤にかかわる産業には必要不可欠であり、防災においても重要視される。また、温暖化や日本海などの環境変化を学ぶことで、海洋環境や水産業に対してもそれらの知見を応用することができる。以上のことから、本学部は、地球科学の諸問題に関わる人材を育

成する点が大きな特色でもあり、関係団体からも、本学部の設置について、要望書が提出されているところである。

(参考資料：⑦「福井県立大学恐竜学部（仮称）設置に関する要望書」)

(4) デジタル科学の活用と産業への応用

近年のデジタル技術の進展により、学術分野でもデジタル技術を取り入れた研究の進展は目覚ましい。デジタルの重要性においては、前述の Society 5.0 の概念でも提言され、それを引き継いだ第6期科学技術・イノベーション基本計画では、この Society 5.0 を実現するために具体的な施策が行われることになった。例えば、実際に取られた大量のデジタルデータを AI で処理し、人間生活の課題に適應できるように社会実装し、様々な効率化・省エネ化を目指すことなどが挙げられる。このような社会においては、デジタルデータの取得や処理の方法、その活用法を学ぶことが必要不可欠であり、実際にデジタルデータを扱った教育の場が必要とされる。

恐竜などの古生物や地質学の分野では、X線 CT 装置や 3D スキャナーなどを活用した解析が研究の主流となっており、多様な形や大きさの化石や、地層の写真や周辺の地形をデジタル化し、それらを現場の記録やデータ解析に利用している。そこで、本学部においてもデジタル技術を活用した講義や実習を行い、恐竜学や地質学を題材としてデジタル社会に適應できる人材を育成することを視野に入れている。作成されたデジタルコンテンツは教育・研究以外にも、観光資源としての活用が見込まれ、Society 5.0 で志向されているデジタルデータの社会実装に対しても対応できるシステムになっている。

このような背景から、本学部の教育ではデジタル技術を用いた実験・分析的手法に取り組むことが大きな柱となっている。大型 CT や 3D スキャナーを使用して、従来の研究手法では限界となっていた化石の形状や内部構造に関する情報を数値化した三次元データにより、統計および比較解析などが容易になり、より客観的で再現性の高いデジタル解析を行うことができる。

一方、本学の看護福祉学部でも、CT スキャン装置を用いた技術開発やデータ解析から、血管や神経系の構造解析や骨折等の死亡原因の解明を行っている。本学部では、看護福祉学部と協力することで、新たな解剖学的・法医学的知見を恐竜研究に応用し、明らかになった内部構造から神経系の発達や感覚器などの解析、骨格を構成する個々の骨と諸動物の骨との詳細な比較観察を行い、それらのデータから恐竜の新たな機能・生態を解明することも目指している。最終的には、これらの医学・解剖学の最新の知見を恐竜学に応用することで、さらなる教育・研究の発展を目指す。

また、デジタル技術の導入は、化石等標本の内部微細構造の観察など、分析の幅を広げると同時に、デジタルデータを共有した教育や学生指導を行うことが可能となり、新たな教育成果を創出できる。さらに、デジタル化した標本を、3D プリンターや VR、AR 等のツールで出力することで、コンテンツとしての利用範囲や様々な分野への応用の可能性を広げるとともに、表現手段としても実験・研究結果を分かりやすく正確に伝達することにつながる。加えて、地質学の分野でも測量や野外現場の測量記録等にデジタルデータを活用する技術が進んでおり、さらに経年的な環境変化もデジタルで記録できるので、多くの分野での実用化が進めることができる。

本学部では、その過程において恐竜や古生物・地質分野の対象そのものをデジタルコンテンツ化する新しい手法やリモートセンシング、GIS（地理情報システム）等を学修することにより、デジタル技術と知見を持つ新たな人材を輩出することが可能となるため、地域における IT 人材不足の解消やデジタル技術の活用を進める DX 政策の一助になり、関係団体からの要望に応えることができる。

【再掲】参考資料：⑦「福井県立大学恐竜学部（仮称）設置に関する要望書」)

3 養成する人材像

本学は、福井県はもとより、我が国の産業と文化の発展に寄与することを目的とし、人類の永続的福祉の向上に貢献することを使命としている。また、前述したように、福井県の恐竜研究は、日本における恐竜学の発展に大きく貢献してきた。

この長い研究の蓄積および本学の使命を踏まえて、恐竜学部は、それをさらに発展させ、地質学を含めた地球科学分野の教育・研究活動を通じ、現代社会の地球科学諸問題に対応するため、幅広い教養と地球科学に関する知識・技術を持ち、多様な局面において協働的および自主的に課題を探求・解決できる人材を育成するとともに、学術情報を地域社会へ積極的に開放することを目指す。

目標を達成するため、1年次には、一般教育科目による文理横断的な教養や地球科学の基礎となる専門基礎科目を学ぶ。2年次には、本学部の軸足である恐竜をはじめとした古生物学や地質学・古環境学に関する専門基礎科目を中心に学び、専門基礎知識と調査研究手法を修得する。3年次には、「恐竜・古生物コース」と「地質・古環境コース」のコース分けを実施し、少人数での実験・実習を通して、より高度な専門知識・技術を学ぶとともに、表現力・思考力・コミュニケーション力を修得する。また、1年次から3年次まで、調査・巡検などのフィールドワークを重視することで協働的な活動を通じて、課題・目標を共有し、相互の理解を深めながら問題解決に取り組む。加えて、2年次後期からは、本学の特色の一つであるデジタルデータに関連する「デジタル古生物学概論」等のカリキュラムが随時開講され、デジタル技術の修得を行う。

卒業生らの進路としては、現在のところ下記が想定される。

○古生物や地質学をはじめとする地球科学を広く学んだことを活かして

研究者、博物館学芸員、教員（理科）、公務員（土木）、地質・土木・建設系のコンサルタント、ゼネコン等建設産業、環境アセスメント関連、ジオパークなど自然科学関連の観光業

○デジタル分野のCTや画像処理関係のデジタル技術の修得を活かして

IT関連産業や測量に関する地質系のデジタル技術産業

4 ディプロマポリシー（学位授与の方針）

恐竜学部は、卒業に必要な所定の単位数以上を修得した学生に対して、次の基準に照らして学士（理学）の学位を授与する。

- ① 地球科学をはじめとする自然科学分野のみならず、文理横断的な幅広い教養・視野を修得している。
- ② 古生物学や地質学、古環境学、デジタル科学等の専門知識を身につけ、またそれらに関連する調査研究方法を修得している。
- ③ プレゼンテーションやディスカッション、フィールドワークを通して自身の理解を分かりやすく正確に伝えることができ、他者とコミュニケーションを取り協働することができる。
- ④ 迅速に発展するグローバル社会やデジタル社会に適応し、外国語やデジタル技術を地球科学諸問題の課題に適切に利活用することができる。
- ⑤ 地球科学分野の中でも恐竜を含む古生物学・地質学において自ら問題意識をもち、研究に取り組むことができる。

5 アドミッションポリシー（入学者受入れの方針）

本学部では、アドミッションポリシーを次のとおり定める。

教育目的を達成するため、本学部は次のような学生の入学を求めている。

- ① 自然科学に興味を持ち、これに関する研究分野におけるフィールド活動に関心・意欲がある。
- ② 多様な自然界の現象に対して科学的探究心を持ち、課題解決に向けて自分の意見を表現できる。
- ③ 自然科学を学ぶ上での理科・数学および国際化・情報化社会に対応するための外国語・情報科学の基礎を身につけている。
- ④ 積極的かつ自主的な学習姿勢を持ち、他者との協働作業などを意欲的に取り組むことができる。

6 カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）

ディプロマポリシーに掲げた資質・学力を身に付けた人材を育成するため、以下のとおりカリキュラムポリシーを定める。

- ① 1年次は、多様な一般教育科目と地球科学の基礎を学び、文理横断的に幅広い知識をもった豊かな人間性を育成し、多面的に考え行動できる能力を身に付ける。
- ② 2年次は、恐竜をはじめとした古生物学や地質学・古環境学に関する専門基礎科目を中心に学び、専門基礎知識と調査研究手法を修得する。
- ③ 3年次には2つのコース（恐竜・古生物コース、地質・古環境コース）に分かれて、より少人数で専門応用科目を学ぶ。少人数での実験・実習を通して、より高度な専門知識・技術を学ぶとともに、表現力・思考力・コミュニケーション力を修得する。また、1年次から3年次にかけて県内外において実施されるフィールドワーク（地球科学フィールド実習Ⅰ・Ⅱ、地球科学フィールド研究等）では、協働的な活動を通じて課題・目標を共有し、相互の理解を深めながら問題解決に取り組む。
- ④ 一般教育科目で学ぶ英語A～Dに加えて、2年次に開講される科学英語を通して、論文を読んで研究を行う上で不可欠となる英語を学ぶ。また、恐竜学特論等では、外国人研究者による講義を行う機会を設けて、国際的コミュニケーション能力、視野、研究の国際性を身につける。デジタル技術については、2年次に開講されるデジタル古生物学概論と同研究法実習等を通じて古生物学や地質学に関連したデジタル技術を修得する。
- ⑤ 3年次前期までに修得した専門知識・技術を基に、より関心の高い専門分野を選定し、3年次後期に研究室に配属する。各コースの課題演習を通じて、卒業研究に向けて具体的な研究テーマを選定する。4年次には、卒業研究における担当教員の個別指導を通して、研究計画を実践し、研究結果を執筆・発表する能力を身につける。
- ⑥ 学修成果は、各授業科目のシラバスに示した授業の到達目標に応ずる到達度の評価方法・基準に従い、試験、実験、実習、論文、レポート等によって、到達目標と達成度に応じた厳格な成績評価を行う。

（参考資料：⑧「養成する人材像と3ポリシーの相関」）

第2 学部の特徴

1 恐竜博物館との教育・研究体制

恐竜学部では、勝山キャンパスに隣接する福井県立恐竜博物館の人的資源、物的資源も活用し、教育・研究を進める。福井県立恐竜博物館は、年間約90万人を超える入館者と全国最大級の展示面積、収蔵資料を誇る古生物専門の博物館であり、30年以上にわたる恐竜化石調査により我が国の恐竜研究をリードしてきた。また、同博物館は北京の中国科学院古脊椎動物古人類研究所やカナダのロイヤル・ティレル博物館など9つの海外研究機関と姉妹提携し、交流を進めている。その他、タイ等でも共同発掘調査を行い、新種の恐竜の発見など研究成果が出ており、人的交流も進めている。

このような、地球科学的に著名な博物館に隣接する勝山キャンパスにおいては、博物館が行っている調査研究、展示・普及活動に積極的に取り組む形で、「フィールド科学-博物館-新学部一体型実学教育」を目指す。博物館に隣接する大学は、世界的にみても稀であり、博物館と連携した教育を実践できる。

博物館の根源である調査・発掘収集・展示作業に、学生が実際に参加して、数万点に及ぶ博物館収蔵標本を教材に活用できるような体制づくりを行う。例えば、発掘調査で発見した化石標本を実習の一環として使用し、展示として仕上げるなどがある。さらに、博物館の研究員の専門性を活かし、講義や助言等において、学生の教育・研究に携わることで、双方向型の交流を促進する。また、学芸員を目指す学生には、学芸員養成課程の「博物館実習」において、恐竜博物館の設備を利用して即戦力となり得る能力の取得を目指す。このように、教育や研究、展示、アウトリーチまで、シームレスに行える新しい教育スタイルを持つ学部を目指す。

双方向型の人的資源の活用に加え、諸研究機器や収蔵庫、化石クリーニング室、図書室などの物的資源についても必要に応じて共用し、有効活用する体制づくりを目指す。本学部は博物館と一体化した新しい教育・研究体制を目指しており、本県の地域貢献に対して重要な役割を担うことができる。

2 現場主義 —フィールド科学の実践— の推進

地球科学の研究テーマは、地球である。我々の足元および目の前の自然を理解することであり、「現場」を知らずに、何も語ることはできない。そこで、本学部では、フィールドワークにおいて現場での地層や岩石、地形の観察を重視する。地球科学では、地層や岩石に記録されている情報を現場で読み解き、論理的に考察しなければならないため、①岩石や鉱物、地層、化石などを識別できる能力、②岩石や地層の形成過程を理解した上で、当時の環境を推察する能力、③岩石の変形や変成などから、地球内部のメカニズムを理解して、地球史を考察する能力、④それら地球の現象を、地球システム全体の中で理解できる能力が必要である。そのため、講義に加えて、実際に野外に出かけ、実物を観察するプロセスが不可欠である。特に、①、②、③について、現場で認識する能力を培うためには、フィールドワークが必要であり、④では、地球史を何億年、何千万年といった地質学的タイムスケールで扱う感覚を身に付けて、地球全体を俯瞰して考察する必要がある。

自然科学の中でも地球科学では、フィールドと直結した多岐にわたる課題が存在しており、それらを発見・解決する能力が、学生自身の成長に大きく貢献する。そのため、本学部では自然という現場から情報を集めて分析し、問題点や解決策を見つけることを教育課程の中に取り入れ、社会の諸問題に自発的に対応できる人材育成を推進する。

特に、福井県には古生代～新生代までの日本列島形成史を物語る地質遺産が分布しており、身近な自然の中でのフィールドワークが可能で、様々な題材として使用できる。さらに、海外で発掘作業も行っており、県外のみならず国外に関するフィールド科学の実践も可能である。

3 国際的視野に立つ教育・研究

地球科学の研究において、化石や地質など研究の対象となるものは、日本国内だけでなく全世界的な規模で考える必要がある。さらに、最新の研究手法や技術、研究に関連する機器など、世界にアンテナを向け研究最前線の情報を共有することが要求される。そのためには、国際的なネットワークを構築し、多国籍な連携を強化しなければならない。また、交流を円滑に行うためには、他国との関わりを通じて、異なる視点や意見を理解し取り入れるなど、グローバルな視野を持たなければならない。

本学部では、福井県に分布する地質学的資源をベースにしながら、本学や県内関係機関が培ってきた国際交流の関係強化を進める。既に、海外での共同発掘や海外標本の共同研究など、国際交流や大学・研究機関との交流協定は進んでいるが、それらをさらに拡大し、インターネットを活用した外国語講義、海外実習など、さらなる国際交流・国際教育の拡大を目指す。

国際的感覚を養うためには、語学の壁を取り除く必要があるため、一般教育科目の「英語 A~D」や専門教育科目の「科学英語」において、その基礎能力を身に付ける。その後のステップアップとして、教員が持つ海外とのネットワークを活かし、海外での実習や外国人学生との交流を通じたグローバルな視野の構築と国際的フットワークの経験を積む。最終目標としては、国内外における国際学会での発表も見据え、教育と研究を推進する。

4 デジタル技術を活用した新分野の展開

本学部では、これまでの古生物および地質学研究を発展させ、新しいデジタル科学の活用を強化する。大型 CT 撮影装置をはじめ、3D スキャナー、3D プリンターなどの設備を使用し、これらの利用を促進することで、「デジタル古生物学」の確立を目指す。具体的には、デジタル機器の活用により、多様な形や大きさの化石から地形までをデジタル化し、取得されたデータを分析し、教育・研究に使用する。

さらに本学部では、古生物学や地質学に関連するデジタル分野の科目を必修とすることで、学生全体がデジタルの基礎知識を修得する。これらの科目では、デジタルデータを作成するための理論や手法、作成後のデータの活用方法などの基礎を学んだ後、応用分野である CG 作成や VR の活用についても学修する。作成・開発した古生物・地質関連のデータは、博物館展示へと展開するだけでなく、観光など産業分野での活用も積極的に行う。さらに、デジタル技術を開発している県内外のデジタル関連企業と共同研究や実用化等も視野に入れる。

そのため、学部所属の教員に加え、令和 5 年 4 月に情報教育とデジタル化推進を目的に設置された教職協働組織である情報センターとも連携を図りながら、デジタル技術を活用した教育を充実させる。

5 地域振興や新産業創出のための産学官協力関係の構築

恐竜をはじめとした古生物学やそれらを取り巻く地質学、古気候学を含めたコンテンツが持つ強みを活用して、観光促進や地域における産業創出に寄与できる活動を推進する。

具体的には、デジタル技術を活用した新しいアウトリーチの提案、ジオパークなどの景観・地質に関する新しい観光デジタルコンテンツ開発への協力などが挙げられる。

さらに、応用地質学の講義に関連企業・団体を非常勤講師として招き、実例を通して、地質学が社会でどのように応用されているかを学んだり、地質コンサルティング関連企業と共同研究やインターンシップを行ったりすることを通して、国土強靱化など広く実社会で応用できる技術を学修する機会を提供する。

このような活動には産学官の連携が不可欠であるが、本学には、経済学部や地域経済研究所があり、ビジネスモデルの構築などについて連携していくことが可能である。さらに、本学の恐竜学研究所では、

2021年に福井新聞社と合同で株式会社恐竜総研を設立し、福井県立大発のベンチャー企業として、同研究所の研究成果や技術を生かしデジタルコンテンツを作成、地域産業への活用を行っている。

また、同研究所は福井県立恐竜博物館と連携しながら、書籍や恐竜展の監修など、産業や地域への振興事業も数多く行っている。本学部でも、これらの機能を強化し、自治体・企業・団体・研究機関などと共同で、大学の研究成果を地域へと発信し、新しいデジタル技術を活用した恐竜コンテンツの産業活用の拡大に努める。

このように、本学部と外部機関が一体的かつ協力的に取り組み、知の地域還元、特に、産業界との連携推進により、本学部の存在価値がより高まることを見込まれる。

6 高大連携の推進

福井県立大学では、高校生の大学における学びに対する目的意識や将来に対する意識の向上を図るために、高大連携による教育体制を整備している。具体的には、高校へ出向き大学での学びや研究を紹介する開放講義の実施や探求学習の支援、公開講座の実施、入試制度改革等である。それぞれの令和4年度実績について、開放講義は18件、探求学習やSSHの支援など高校から依頼があったものは55件、公開講座は70件である。また、入試制度改革については、令和2年度入試より多様な学生を確保するため、チャレンジ精神や行動力など人物評価を重視する総合型選抜を導入した。また、受験生の利便性向上を図るため、インターネット出願を導入した。

これらの取組みにより、高校側にとっては、生徒の進路選択のアドバイスや教育内容の充実が図られ、大学側では、大学の魅力を早期段階からアピールすることが可能となり、高校における教育内容を把握して大学における指導の改善につなげることができる。

本学部においても、これらの取組みは継続するとともに、理科教育を行う立場として、高校の設備にはない高度で最先端のデジタル機器に触れる機会を提供することで、高校における教育の高度化・多様化に寄与することを目指す。特に、勝山キャンパスが所在する奥越地域（勝山市、大野市）の高校生らに大学施設を開放することは、地元愛の醸成や、恐竜・地質などへの関心の高まりが期待でき、地域貢献活動や長期的な学生確保にも繋がっていく取組みであると考えている。

第3 学部の名称及び学位の名称

【学部名称】

恐竜学部 英訳名称：Faculty of Dinosaur Paleontology

【学科名称】

恐竜・地質学科 英語名称：Department of Dinosaur Paleontology and Geology

【学位名称】

学士（理学） 英語名称：Bachelor of Science

福井県内では、30年以上にわたり恐竜化石発掘調査が継続的に実施されてきた。

また、日本における恐竜学の研究は2000年以降に盛んになり、2010年頃の恐竜研究には「恐竜学」という用語が一般的に使用されようになった。その内容は、従来のような狭い恐竜研究のみに対して使われるのではなく、今では地質、古環境など恐竜に関連する学問分野の研究成果も総合して「恐竜学」としての名称を研究者も理解して使っており、この用語は古生物の学術コミュニティの中では認知されている。そのため、普及書の多くにも「恐竜学」という題名がつけられ、様々な学問分野からの応用研究も含めて出版されている。

本学部で学ぶ主要な学問分野は大きく恐竜・古生物と地質・古環境の2分野に区分でき、また、両分野にまたがるデジタル分野があり、主として3つの柱から構成される。恐竜・古生物分野では、生態学、進化学、解剖学など多くの専門分野を学修し、地質・古環境分野では、恐竜が住んでいた周辺環境や当時の気候、植生なども学修する。実際に学修する細目をより明確に示すため、2つの分野の代表的なキーワードを明記して「恐竜・地質学科」とした。

その上で、本学部が目指す学術上の到達点は、総合学問としての「恐竜学」であり、その中には学科およびコース名で掲げている恐竜、古生物分野はもちろんのことながら、地質や古環境分野も一つの要素として内包される。そのため、それらすべての学問分野を学修できる本学部の特色を総括する名称として、「恐竜学部」の名称こそがふさわしいと考えている。

本学部では、この広い「恐竜学」を通じて、地球科学やデジタル科学の知識と素養などを身につけ、恐竜研究を含めた関連領域や、土木、建設、環境、IT技術などの分野などに進出し、社会に貢献できる学生を育てることが最終目標である。その目標を明確に示すため、学部名は「恐竜学部」とした。

なお、恐竜学部 恐竜・地質学科には、恐竜をはじめとする古生物を中心に学修する「恐竜・古生物コース」と地層や古環境、古気候学を学修する「地質・古環境コース」の2つのコースを設ける。学位名称については、本学部で学ぶ地球科学分野（古生物学や地質学等）を内包する理学が適切であるため、「学士（理学）」とする。

第4 教育課程の編成の考え方及び特色

1 カリキュラムポリシーについて

ディプロマポリシーに掲げた資質・学力を身に付けた人材を育成するため、以下のとおりカリキュラムポリシーを定める。

- ① 1年次は、多様な一般教育科目と地球科学の基礎を学び、文理横断的に幅広い知識をもった豊かな人間性を育成し、多面的に考え行動できる能力を身に付ける。
- ② 2年次は、恐竜をはじめとした古生物学や地質学・古環境学に関する専門基礎科目を中心に学び、専門基礎知識と調査研究手法を修得する。
- ③ 3年次には2つのコース（恐竜・古生物コース、地質・古環境コース）に分かれて、より少人数で専門応用科目を学ぶ。少人数での実験・実習を通して、より高度な専門知識・技術を学ぶとともに、表現力・思考力・コミュニケーション力を修得する。また、1年次から3年次にかけて県内外において実施されるフィールドワーク（地球科学フィールド実習Ⅰ・Ⅱ、地球科学フィールド研究）では、協働的な活動を通じて課題・目標を共有し、相互の理解を深めながら問題解決に取り組む。
- ④ 一般教育科目で学ぶ英語A～Dに加えて、2年次に開講される科学英語を通して、論文を読んで研究を行う上で不可欠となる英語を学ぶ。また、恐竜学特論等では、外国人研究者による講義を行う機会を設けて、国際的コミュニケーション能力、視野、研究の国際性を身につける。デジタル技術については、2年次に開講されるデジタル古生物学概論と同実習等を通じて古生物学や地質学に関連したデジタル技術を修得する。
- ⑤ 3年次前期までに修得した専門知識・技術を基に、より関心の高い専門分野を選定し、3年次後期に研究室に配属する。各コースの課題演習を通じて、卒業研究に向けて具体的な研究テーマを選定する。4年次には、卒業研究における担当教員の個別指導を通して、研究計画を実践し、研究結果を執筆・発表する能力を身につける。
- ⑥ 学修成果は、各授業科目のシラバスに示した授業の到達目標に応ずる到達度の評価方法・基準に従い、試験、実験、実習、論文、レポート等によって、到達目標と達成度に応じた厳格な成績評価を行う。

2 教育課程編成の基本方針とその体系性について

(1) 科目区分の設定

本学では、多面的で柔軟な思考に基づく確かな判断力の養成を目指す一般教育と、各学部・学科における専門教育とを有機的に関連付けた総合的な教育を行っている。

（参考資料：⑨「カリキュラムツリー」、⑩「DPと授業科目の対応表」）

【一般教育科目】

本学では、専門的な知識・技能の修得以外にも、変化の激しい現代社会において、柔軟に対応できる能力を身に付けることを目指し、リベラルアーツ教育を行っている。本学部のカリキュラムポリシー①にあるとおり、文理横断的な幅広い知識を身に付けて社会課題を解決していくことも目指している。他学部の学生とともに、多彩な授業を受講することを通して、自らの価値観やライフスタイルを練り上げることができ、さらに、学問的背景の違いを知ること、気づきが生まれ、多様な思考力や総合的な知へと繋がっていく教育を行う。

一般教育科目は、さらに以下の科目群に分けられる。

①必修科目

必修科目では、学術研究や社会生活に不可欠であり、国際化時代に求められる英語科目および高度情報化が進展する現代社会に必須の情報処理能力を涵養する情報科目を配置して基礎能力を養う。また、これらの科目は本学部のカリキュラムポリシー④にあるとおり、2年次以降で英語やデジタル技術について教育・研究を行うための基礎を学ぶ役割も担っている。

・ I 英語

国際化が進む現代においては、異文化理解やコミュニケーション能力、論理的な文章を書く能力、説得的なプレゼンテーション能力が求められる。特に、英語を修得することは、研究のみならず、国際化に対応する上で必要であるため、本学では「英語 A」、「英語 B」、「英語 C」、「英語 D」の4つに分けて、必修科目として主に1年次に開講する。

また本学では、英語力の向上と国際化をより一層推し進めることを目的として、令和7年度より教職協働組織である国際センター（仮称）を設置する。全学的な英語教育改革と多文化理解のための教育プログラムの設定、ならびに、国際交流および留学生支援により、福井を拠点にグローバルに活躍する人材の育成を行う。

・ II 情報

現在の情報社会は Society 5.0 に向けて進化している。Society 5.0 とは、内閣府が提唱した「仮想空間と現実空間を高度に融合させたシステムによって開かれる新たな社会」を意味する。この社会では、高度な技術を使いこなすためのリテラシーや基盤となる科学・数学的な知識が必要になる。また、AIなどの技術が高度化する社会だからこそ、感性や想像力などAIでは代替できない能力の向上も望まれる。これらを踏まえて、初等中等教育では、令和2年度より新学習指導要領が始まり、令和7年度からは共通テストにおいて「情報」が追加される予定である。

このような流れの中で、大学における情報教育は重要性が高まるため、本学部では、情報リテラシーや社会におけるAIの利活用について学ぶ「情報科学」および、統計解析の基礎を学ぶ「データサイエンス基礎」を必修科目（2単位）として1年次に修得させる。

さらに、令和5年4月には、情報教育とデジタル化を推進する教職協働の組織である「情報センター」を設置し、産業界からの要請に応えられるよう、IT技術やデータを活用できる人材の養成のため、全学的な情報教育の充実を図るとともに、大学全体を俯瞰したDX戦略の構築を行っている。

②選択必修科目

選択必修科目は、学生が所属する学部や専攻の領域にとらわれず、幅広い教養と自発的な学修意欲を培うことを目指した科目群である。

・ I キャリア

職業理解および自己理解を深め、自身の目指すキャリアデザインを検討することを目的として、「キャリア形成論」を開講する。主に1年生を対象学年とすることで、学生生活の充実から、職業や産業、労働などのキャリアデザインへの繋がりを学んでいく。

・ II 英語

必修科目としての英語科目に加えて、選択科目として、より高度な授業を展開していく。例えば、留学を目指す学生用の科目や資格取得に向けた科目であり、発展的な学びを望む学生を支援する。

・Ⅲ情報

選択科目では、基礎科目をさらに発展させて、IT パスポート試験等の国家資格を目指す学生用の科目や、プログラミング関係の科目を配置することで、コンピュータやプログラムなど情報について深く学ぶことができる環境を整える。

・Ⅳ人文科学、Ⅴ社会科学（いわゆる文系科目）

社会課題の多様化・複雑化が進み、単独の専門分野の地による課題解決が困難になっている現代においては、学部を超えた幅広い分野を学ぶことが重要である。例えば、技術がどのように社会や人々に影響をもたらしてきたかという歴史的な視点や、社会およびその構成員一人ひとりの幸せの実現のために求められる研究開発や社会実装の在り方の検討などである。

そこで、本学部では、Ⅳ群・Ⅴ群の主に文系科目と言われる科目群より、10 単位以上を取得することを卒業要件としている。これは、Ⅶ群の主に理系科目と言われる科目群の必要単位数よりも多く設定しており、文理横断的な思考力を養うことを目的とする。

・Ⅵ健康科学

この科目群では、スポーツに関する実技や運動と健康の関係性、健康・体力の維持増進などを学ぶことを通して、生涯にわたって、自主的に安全でかつ効果的に健康・体力づくりを実践することを目指す。

・Ⅶ自然科学（いわゆる理系科目）

この科目群は主に理系科目になるが、地球科学以外の自然科学系学問の知見を得ることは、地球科学の課題へアプローチしていく上で重要である。例えば数学は、数や図形を基礎として、これらを抽象化・一般化して得られた諸概念から論理的に組み立てられた知識体系であり、地球科学を含む様々な分野に適用しても、その諸現象を探ることができるという普遍性を持っている。この数学的思考方法を用いることで課題解決へつながることもある。

・Ⅷ地域科目

本学は、1992 年の開学以来、「魅力ある大学」「個性ある大学」「開かれた大学」の 3 つの基本理念に基づき、優秀な人材の輩出や教育研究成果の地域への還元など、地域および産業の振興に貢献してきた。その過程では、福井県という地域全体をキャンパスと捉えて、県内各地にキャンパスを展開し、学生と住民が一緒になって地域を盛り上げてきた。

一般教育科目においても、選択科目として、「福井を学ぶ」や「恐竜学」のように、福井という地域の特性について幅広く学ぶとともに、福井が有する多様な資源を世界的な視点のなかに位置づけ、地域において本学が果たす役割を理解するための科目を配置する。

・Ⅸ第 2 外国語

この科目群では、英語以外の中国語や韓国朝鮮語を学ぶ。英語以外の他の言語を学ぶことで、自分のこれまで知っていたものとは別の文化や社会を知り、教養が深まることが期待できる。言葉は人との交通手段であると同時に、文化理解の入口である。新たな言語を学べば、人や世界とつながる道が増え、視野を広げることができる。

・Ⅹ導入教育

ゼミとは、専門的事柄について少人数で学ぶ大学特有の授業形態である。大学での学問や研究の手法は、高校以前の学修スタイルとは異なるため、本学では、「文献の読解と要約（読む）」「レポート作成（書く）」「効果的なプレゼンテーション（伝える）」「ディベート（対話する）」「各種資料の検索（調べる）」といったアカデミック・スキルを実践的に学べるよう、1年次に「導入ゼミナール」や「教養ゼミナール」を選択科目として設けている。学部・学科の専門とは異なる観点から、自分の興味・関心に応じてゼミを選択して学修を行っていく。

【専門教育科目】

本学部では、現代社会の地球科学諸問題に対応するため、幅広い教養と地球科学に関する知識・技術を持ち、多様な局面において協働的および自主的に課題を探求・解決できる人材を育成する。

そのため、専門教育科目では、専門基礎科目（必修）、専門応用科目（コース必修・選択必修）の3つのカテゴリーから構成される。

①専門基礎科目（必修）

本科目群は、地球科学を学ぶものにとって不可欠な内容となっており、1年前期より必修科目として配置し、基礎的な知識を修得する。例えば、1年次には、地球科学全体の基礎を広く学ぶ「地学概論」や古生物学の基礎を時代ごとに学修する「古生物学概論」、地層の形成過程や堆積物の基礎を学ぶ「地層学」などを必修科目とする。これらの専門基礎科目は、カリキュラムポリシー①②に該当し、古生物学・地質学を専門的に学修するために重要な科目となっている。

また、カリキュラムポリシー③にあるように、地球科学の諸現象を理解するためには、野外（フィールド）における調査・観察、また野外で応用できる解析・分析手法の修得が重要である。そこで、県内の豊かな自然がどのように成立したのかを屋外における露頭観察を通じて考察する「地球科学フィールド実習Ⅰ」や野外調査や研究に必要な基礎的な実験手法について学び野外で採取した試料を分析し考察を行う「地球科学基礎実験」などを専門基礎科目として配置する。

さらに、本学部ではカリキュラムポリシー④にもあるとおり、デジタル技術の活用を特色としているため、デジタルデータ取得の意義や制作方法の理論を学ぶ「デジタル古生物学概論」や3Dスキャナーや3Dプリンターを使ったデジタルデータの取得・活用を行う「デジタル古生物学研究法実習」を行う。

この他、カリキュラムポリシーの⑤にあるとおり、配属された研究室の専門分野に関連する専門書や学術論文を読解して議論を行うことを通して、個々の文献の背景および内容の理解を深めて卒業研究にむけた論理的な思考力や解析力を養成する「卒業演習」を配置する。そして、卒業研究のテーマを定めて、実験等を計画・実施し、その成果を論文にまとめる「卒業研究」を行う。この過程で、研究の進め方や思考方法など論文作成に関わる基本、様々な実験・調査・解析の方法、実験技術や情報技術を修得する。また、論理的な記述力や考察力に加え、中間発表における討論や卒業研究発表などでコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につける。

②-1 専門応用科目（コース必修科目）

3年前期に2つのコース（恐竜・古生物コース、地質・古環境コース）に配属されてからは、主にカリキュラムポリシー③にあるように、応用的な知識や技能を修得するため、コース必修科目を学ぶ。コースごとの学修内容は以下のとおりである。

【恐竜・古生物コース】

恐竜・古生物コースにおいては、恐竜などの脊椎動物から微古生物まで古生物に関連する分野を、その生態から分布、統計学的手法を用いた形態分析などを広く学修する。また、古生物の分類や生態の推

定を行うためには、解剖学的知見を最大限に生かして情報を引き出す必要があるため、現生脊椎動物の体の構造を理解し、その特徴を比較することで、絶滅種を含む脊椎動物の進化史を辿る「古生物学実習Ⅱ」も行う。

【地質・古環境コース】

地質・古環境コースでは、地層や堆積物を分析することを通して、その形成過程や性質を理解した上で、古環境を推定するための手法を学修する。また、日本列島は4枚のプレートがせめぎ合っている特異な地質的特徴を持つ場所に位置しているため、火山や地震が頻繁に発生する。これらの災害を紹介して、その原因を学び、防災関係の知識も学修する「災害・防災学Ⅰ」や「災害・防災学Ⅱ」を配置する。この他にも、「地質調査法実習Ⅱ」では、従来の点と線で地形を表現する二次元的な手法から応用させて、ドローンや3Dレーザーを用いた手法を学んで、実際の野外の露頭を対象に測量を行う。これらの三次元的な測量では、従来手法に比べて、短時間で正確な計測が可能になる。また、測量データをデジタルデータとして取得できるため、その先の加工や解析が行いやすくなるなどの利点もあり、野外の露頭や、貴重な発掘現場などの野外情報をデジタル化することに加え、現場の状況を精密に保存することを通して、災害前後の比較や、発掘の進捗管理、遠隔地でのVR体験など様々な応用が可能となる。

②-2 専門応用科目（選択必修科目）

両コース共通の選択必修科目としては、恐竜を含む古生物や地質・古環境に関連する発展的な科目を設定している。例えば、古代の植物の分類や進化、生態を扱う「古植物学」や岩石・鉱物の種類や生成理論を学ぶための「岩石・鉱物学」などがある。

また、本学部においては、博物館資料の収集、保管、展示および調査研究、その他これと関連する事業を行う博物館法に定められた、専門的職員である学芸員を養成する学芸員養成課程を設置する。学芸員養成課程における「博物館に関する科目」9科目19単位については、隣接する福井県立恐竜博物館と協働するなどして開講する。具体的には、以下のとおり学修していく。

博物館に関する科目の履修モデル

(博物館法施行規則第1条に基づき、博物館実習は3単位、それ以外は2単位)

1年次	2年次	3年次	4年次
	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館概論 ・博物館経営論 ・博物館展示論 ・博物館教育論 ・博物館情報・メディア論 	<ul style="list-style-type: none"> ・生涯学習概論 ・博物館資料論 ・博物館資料保存論 	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館実習 (主に福井県立恐竜博物館で行う)

【教職課程に関する科目】

本学部では、高等学校教諭第一種免許（理科）の取得が可能となるよう準備を進めており、教職課程に関連する科目として、「教育原理」、「教育史」、「教師論」、「教育制度論」、「教育社会学」、「教育心理学」、「発達心理学」、「特別支援教育」、「特別活動及び総合的な探究の時間の指導法」、「教育方法論（情報通信技術の活用含む）」、「生徒・進路指導論」、「教育相談」、「教育実習」、「教職実践演習」、「道徳教育の理論と実践」、「理科教育法Ⅰ」、「理科教育法Ⅱ」、「学校インターンシップA」、「学校インターンシップB」、「化学Ⅰ」、「生物学Ⅰ」の21科目を設定する。これらについては、卒業要件に含まれない自由科目として設定している。

(2) 主要授業科目について

主要授業科目は、学生に学位を取得させるに当たり、当該学位のレベルと分野に応じて達成すべき能力を育成するために必要な科目群である。本学部では、養成する人材像や3つのポリシーを踏まえた上で、卒業要件として修得を必要としている専門基礎科目を主要授業科目とする。

なお、主要授業科目については、主に基幹教員が授業を担当し、どの科目が主要授業科目に当たるかは、HPを通して学内外へ周知する。

(3) 単位時間数について

各授業科目の単位数は、教室等での授業時間と事前事後学修を合わせて、45時間の学修をもって1単位とする。授業方法別にみると、講義・演習は、1時間の授業に対して、2時間の事前事後学修を必要とするものとし、15時間の講義・演習をもって1単位とする。実験・実習・実技については、30時間から45時間の実験もしくは実習、または30時間の実技をもって1単位とする。

(4) 1年間の授業期間及び各授業科目の授業期間について

1年間の授業期間については、教育効果を十分に確保する意図から35週とする。また、各授業科目の授業期間について、本学は前期・後期の2学期制であるため、集中講義を除いて、原則15週としている。

第5 教育方法、履修指導方法及び卒業要件

1 教育方法

(1) 授業形式・学生数設定

本学部の教育課程は、大きく「一般教育科目」と「専門教育科目」の2つの区分からなり、授業実施方法は、実施形態によって、講義による教育展開を図る講義科目、参加・双方向形式の展開が含まれる演習科目、講義で学んだ内容の理解を深めるために、理論や仮説が正しいかを確認する実験・実習等科目に区分される。それぞれ、以下の目的で開設する。

<講義科目>

講義科目の例としては、一般教育科目に配置する「英語A～D」、「哲学」、「西洋史」等、専門教育科目に配置する「地学概論」、「古生物学概論」、「地層学」等がある。

講義科目は、教員が多数の学生に対して、知識や技術を伝えるために行う科目であり、科目ごとの教育目標、教育効果、授業の目的、内容に照らして授業を展開していく。

<演習科目>

演習科目の例としては、一般教育科目に配置する「データサイエンス基礎」、「導入ゼミナール」等、専門教育科目に配置する「地質図学演習」、「卒業演習Ⅰ」、「卒業演習Ⅱ」がある。

演習科目は、学修内容を模擬的・総合的に学生に体験させ伝える科目であるため、環境や条件など実際の場面を想定して行う。例えば、「地質図学演習」では、野外の地質を想定してモデルを立て、地質図を描いていく。

<実験・実習等科目>

実験・実習等科目の例としては、一般教育科目に配置する「体育実技Ⅰ～Ⅲ」、専門教育科目に配置する「地球科学フィールド実習Ⅰ」、「地球化学実験」、「デジタル古生物学研究法実習」等がある。

カリキュラムポリシーにも記載のとおり、本学部の専門教育科目においては、知識や理論の実践という観点から、実験・実習科目を多く配置しており、これらを通して、その実験結果や分析結果を論理的に整理し、分かりやすく正確に伝えることができる授業を展開する。

学生数の設定について、本学では基本理念「個性ある大学」の中で、少人数教育を実践していくことを宣言している。これに沿って、本学部の教育課程においても、少人数教育を基本とし、授業の内容に応じた学生数の設定については、授業科目ごとの内容に即した教育目的を効果的かつ確実に達成するために、講義形式、演習形式それぞれに応じた受講生数を設定し、教育効果を高めるよう配慮する。例えば、演習科目や実験・実習等科目では、数人程度のグループに分かれて授業を行い、講義科目のうち学部専門教育科目については、学部学科全体（30人程度）またはコース単位（各コース15人程度）の学生を対象として授業を展開する。

(2) 履修モデル・配当年次

授業科目の年次ごとの履修計画は、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーに沿って、次のとおり設定する。

○1年次

一般教育科目を中心に履修することで、豊かな人間性を育成し、国際化やデジタル化など急速に変化し、問題が複雑化する現代社会において多面的に考え行動できる能力を身に付ける。具体的には、国際

化やデジタル化において基礎となる英語や情報科目を配置する。また、文理横断的な知識を身に付けるために、一般教育科目において理系科目だけでなく、Ⅳ人文科学群・Ⅴ社会科学群のような文系科目を配置し、それらの群の中から理系科目よりも多い10単位以上修得することを卒業要件にする。

専門教育科目においては、「地学概論」や「古生物学概論」等、地球科学の基礎を学ぶための必修科目を配置する。また、「地球科学フィールド実習Ⅰ」を1年次前期に開講することで、早期から協働的な活動を通じて課題・目標を共有していく。

○2年次

専門教育科目において、1年次と同様に地球科学の基礎を学ぶための専門基礎科目を配置しつつ、それらの知識を活かした「地質調査法実習Ⅰ」や「古生物学実験」等の実験や実習を多く配置することで、地球科学に欠かせない技能と経験を修得する。また、卒業演習Ⅰ・Ⅱや卒業研究等においては英語の論文を扱うことが必要不可欠になるため、「科学英語」を配置して、地球科学の論文に特化した英語の学修を行う。なお、本学部においては、学芸員養成課程を設置する予定であるが、その科目についても2年次から本格的に履修が始まる。(学芸員養成課程については、必修科目ではなく選択必修科目である。)

○3年次

3年次より「恐竜・古生物コース」、「地質・古環境コース」に分かれて、各コースが開講する専門応用科目などを学ぶことにより、各専門分野における高度な知識や思考力を修得する。さらに、各授業においては、随時必要なタイミングにおいて、隣接する福井県立恐竜博物館をはじめ、福井県立年縞博物館等を訪問し、役割などを学んでいく。

また、専門性をさらに強化するために、3年次後期から、所属する研究室を選択して地球科学のより深い学びへと発展させる。1研究室当たりの学生数は、1学年あたり2人程度として、少人数教育によるきめ細かい指導を行う。

各科目においては、1年次や2年次に講義で学んだ知識や実験・実習の成果を用いて、福井県内のフィールドで実際に野外調査を行い、その成果を発表する「地球科学フィールド研究」を配置する。また、学生が関心事項を取り上げ、関連論文を収集・総括して発表する「古生物学課題演習」と「地質学課題演習」を各コースに配置することで、卒業研究に向けて、研究論文の作成の仕方を学ぶ。

さらに、「恐竜発掘実習」(選択必修科目)を配置して、タイで発掘調査実習や現地の研究者や学生と交流を行うことで、語学力の向上、グローバル・コミュニケーション力の獲得、研究最前線の情報収集を図る。

○4年次

「卒業演習Ⅰ」、「卒業演習Ⅱ」や「卒業研究」において、これまで1~3年次に学修した分野から、自身の関心がある課題(研究テーマ)を設定し、その解決に向けた研究・考察し、得られた成果を論理的に整理して論文にまとめ、発表を行う。これらの作業を通して、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力の他に、自ら課題を探究する能力を修得する。なお、「卒業研究」の指導においては、教員が研究の進め方や実験等の方法について、相談に乗りながら個別指導を行っていく。

(参考資料：⑩「履修モデル」)

(3) ティーチング・アシスタント(TA)制度

本学部では、ティーチングアシスタント(TA)を配置し、実験・実習等における教員の補助(実験設備等の準備と後片付け)や学生への指導補助、技術支援を行うことで、安全かつ効果的に授業が実践さ

れる体制を整備する。また、ティーチングアシスタント（TA）の人員については、本学大学院生物資源学研究科に派遣を依頼することとする。

（参考資料：⑫「福井県立大学大学院ティーチング・アシスタント取扱要領」）

（4）オフィスアワーの設定

授業内容や履修方法等に関する学生の質問や相談に応じるため、授業担当教員はオフィスアワーを設定し、シラバスに明示することで、学生全体に周知した上で実施する。

（5）デジタル化による教育・研究推進

本学では、「情報教育・DX委員会」を設置し、全学的にデジタル化を推進している。すでに、本学部学生が主に1年次に学修する永平寺キャンパス全館での高通信容量のWi-Fi環境は整備済みである。主に2年次以上に学修する勝山キャンパスにおいても、同様に高通信容量のWi-Fi環境を整備予定である。

また、令和5年4月には、情報教育とデジタル化を推進する教職協働の組織である「情報センター」を設置し、産業界からの要請に応えられるよう、IT技術やデータを活用できる人材の養成のため、全学的な情報教育の充実を図るとともに大学全体を俯瞰したDX戦略の構築を行っている。

このような大学のデジタル化の流れに合わせて、本学部においても、デジタル技術を用いた実験・分析的手法に取り組む。具体的には、学部の特色に記載したとおり、従来の研究手法では限界となっていた、化石の形状や構造に関する情報を、大型CTや3Dスキャナー等を通して数値化した上で統計解析や比較解析を行う。さらに、これらのデジタルデータを3DプリンターやVR等で出力することで、コンテンツを観光など産業分野に応用が可能であり、相手に情報を分かりやすく正確に発信する能力が身につく。

（6）学生の福利・厚生に対する配慮

身体・精神保健に関する相談には、永平寺キャンパス・勝山キャンパスともに医務室および学生相談室を設けており、学生の利用が可能である。また、ハラスメントに対しては、学内に設置してあるハラスメント等人権問題に関する委員会や教育講演等を通して予防する。

また、勝山キャンパスが立地する勝山市が、学生の住まい、食事、通学等に関して、支援を講じる予定であり、充実したサポートを行う。

（参考資料：⑬「公立大学法人福井県立大学ハラスメントの防止等に関する規程」）

（7）単位互換制度

本学においては、本学在学中に県内協定校（福井大学、福井工業大学、仁愛大学、敦賀市立看護大学、福井医療大学、仁愛女子短期大学、福井工業高等専門学校）において修得した単位が、本学の単位として認定される制度を設けている。なお、卒業要件単位として認められるのは、60単位までである。また、受講できる科目は各大学で単位互換科目として開放されている科目に限られる。

（参考資料：⑭「令和5年度後期福井県内大学および短期大学並びに高等専門学校間単位互換制度による福井県立大学特別聴講学生募集要項」、⑮「単位互換制度に関する恐竜学部開放予定科目」）

（8）留学生の入学について

本学部では、特別選抜の一つにおいて、「私費外国人留学生特別選抜」を行う。募集人数については、若干名である。可否判定は、日本留学試験の成績、面接および出願書類の内容を総合して行う。留学生の経費支弁能力の確認方法は誓約書の提出、在籍管理方法は身上調書の提出で行う。入学後については、

チューター制度を利用し、留学生1人につき、本学日本人学生1人を付け、履修登録や生活をサポートしている。

2 履修指導方法及び卒業要件

(1) 履修指導方法

学生に対する履修指導は、前期（4月1日～9月30日）および後期（10月1日～3月31日）それぞれの当初に行うオリエンテーションにおいて、基本情報、規則、履修方法、評価方法、実習にかかる費用等に関する情報の周知を図る。特に、前期オリエンテーション時には、履修の手引きを配布することで、学生のスムーズな履修手続きを支援する。また、履修にあたって、配慮する事項がある場合等の個別対応として、キャンパスソーシャルワーカーを配置し、適切な対応を学生支援委員会等の教職協働の場において検討することで、他学生と同等の修学環境が確保できるように支援していく。なお、Webシステムから、学生が自由にシラバスにアクセスし、各授業科目の「授業概要、配当年次、必修選択の別、担当教員、授業計画、到達目標、評価方法、教科書、参考文献等」に関する情報を入手できる体制を構築している。

また、学生の適切な学修時間を確保した履修計画を実施するために、履修科目の年間登録上限（CAP制）を導入し、年間登録単位数の上限を49単位と定めている。

(2) 成績評価

各授業科目の成績評価は、100点満点の60点以上を合格として、授業科目所定の単位が与えられる。なお、成績評価と点数の関係は以下のとおりである。

判定	点数	合否
優	80点以上	合格
良	70点以上 80点未満	
可	60点以上 70点未満	
不可	60点未満	不合格

※学生は、当該期の履修科目に係る成績評価について、疑義がある場合は、授業担当教員（非常勤講師の場合は学部長等）から説明を受ける。その説明では解決が得られなかったときは、次に掲げる事項に該当する場合、学部長等へ異議を申立てることができる。（申立ては成績開示日から原則として8日（卒業判定に関わる場合は3日）以内）

①成績の誤記入等、明らかに授業担当教員の成績評価誤りであると思われるもの

②シラバスまたは授業担当教員の説明等により周知している成績評価の方法から、明らかに逸脱した評価であると思われるもの

（参考資料：⑩「成績評価異議申立てに関する要領」）

また、本学では、履修科目の成績の平均値で、学修到達度を客観的に表す成績評価方法であるGPA制度を導入しており、履修指導や学修支援に用いている。計算式は以下のとおりである。

点数	GP	参考（本学評価）
80点以上	$(\text{点数} - 55) / 10$	優
70点以上 80点未満		良
60点以上 70点未満		可

60 点未満	0	不可
--------	---	----

なお、各学期、年度、通算の GPA を算出して成績通知書に記載することで学生に通知している。
 (参考資料：⑰「福井県立大学 GPA に関する要領」)

(3) 卒業要件

本学部における卒業要件は、以下に掲げる基準を満たし、合計 124 単位以上修得することである。

<一般教育科目>

以下の基準を満たした上で、合計 28 単位以上修得すること。

- ・必修科目：12 単位修得すること。
- ・選択必修科目：Ⅳ群・Ⅴ群から 10 単位（主に文系科目）、Ⅶ群から 6 単位以上（主に理系科目）修得すること。

<専門教育科目>

- ・専門基礎科目：63 単位修得すること。
- ・専門応用科目：
 - ▶ 恐竜・古生物コースの場合、恐竜・古生物コース必修科目 12 単位および両コース選択必修科目 12 単位を含めた合計 24 単位以上修得すること。
 - ▶ 地質・古環境コースの場合、地質・古環境コース必修科目 12 単位および両コース選択必修科目 12 単位を含めた合計 24 単位以上修得すること。

<一般教育科目、専門教育科目を問わず>

- ▶ 恐竜・古生物コースの場合、9 単位以上修得すること。
- ▶ 地質・古環境コースの場合、9 単位以上修得すること。

第6 実習の具体的計画

1 実習の目的

卒業要件に含まれない自由科目ではあるが、教員免許状の取得に必要な実習（教育実習）を行う。教育実習は、学校組織のあり方を理解し、体験を通じ、大学で学んだ知識や理論、技能の再確認を行うとともに、教育者としての自覚や態度を身につけることを目的とする。各実習の時期・期間は以下のとおりとする。

＜配当年次・実習時期・期間＞

配当年次・実習時期：4年次前期（6月～9月）

期間：2週間（60時間）

2 実習先の確保の状況

高校免許の場合、勝山キャンパスが所在する奥越地域の2校（福井県立勝山高等学校、福井県立大野高等学校）から、実習先として受入承諾書を得ている。

実際に、学生がどの高校で実習をするかは、まず大学から学生へ福井県内の実習協力校を紹介し、学生自身で内諾を求めさせて教育実習校を確保することになっている。

（参考資料：⑱「教育実習受入承諾書」）

3 実習先との契約内容

実習依頼段階においては、教育実習受入依頼書を実習先に提出し、それに基づく受入承諾書を交わす。

4 実習水準の確保の方策

教育実習の目的を達成し、実習水準を確保するために以下の要件を実習実施の条件とする。

- ①教職の意義を理解し、教育実習に対する積極性と熱意を有していること。
- ②あらかじめ、実習校を決める手続きを主体的に行うこと。
- ③教育実習は4年次に行うが、「教師論」、「教育原理」、「教育心理学」および「理科教育法Ⅰ・Ⅱ」の授業科目については、教育実習前の3年次までに単位を修得すること。
- ④教育実習の事前・事後に所定のカリキュラムを履修すること。

5 実習先との連携体制

実習開始前に、本学の実習担当教員と実習先の実習指導教員で、実習の目的や到達の目標、実習の方法と内容、成績の評価などについて十分な打ち合わせを行い、実習先での指導体制を整えるとともに、実習期間中においても、各実習先を実習担当教員が訪問し、実習状況の確認や打ち合わせを行うこととする。

さらに、実習の開始前と終了後における定期的な情報交換や意見交換を行うとともに、実習先との間で、日常的な連絡・調整による緊密な連携体制をとることにより、円滑な意思の疎通を図ることができるよう努めることとする。

6 実習前の準備状況（感染予防対策・保険等の加入状況）

学生の実習に際して、事前準備として、本学において次のとおり体制を整えている。

学生の健康管理については、本学で全学生対象に年1回実施している定期健康診断を受診させ、学生の健康状況を把握し、必要に応じて個別の健康相談等を行っていく。また、入学時に学生教育研究災害障害保険および学生教育研究賠償責任保険へ全員加入している。さらに、感染予防対策として、事前指

導時において予防接種等の必要性について理解させる。

また、実習施設においてノロウイルス感染やインフルエンザの流行などによる実習の計画変更に対しては、実習施設との個別対応によって実習時期等を変更するよう配慮する。

実習中に知り得た情報についての守秘義務や SNS の利用に係る注意点については、下記の留意事項を事前指導等において学生に十分指導する。

- ・教育実習期間中に知り得た校内の諸事情、生徒・保護者に関する個人情報等については絶対に口外してはならない。守秘義務の内容については、帰宅途中に実習生同士で話し合うことや、帰宅後に家族や友人等に話すことも慎むこと。
- ・教育実習期間中に知り得た情報や実習中の写真等を、インターネット上に載せてはならない。鍵付きの SNS や LINE 等、グループ内の共有であっても厳禁である。

7 事前・事後における指導計画

教育実習の事前・事後指導として、以下のような計画・内容で事前・事後の指導を行う。

内 容	方 法	時 期	期 間
教育実習オリエンテーション	講義<大学教員>	1年次1月	1時間
教育実習全体の流れについて	講義<大学教員>	2年次1月	1時間
教職に関する講話(1)<教職経験者の講話>	講義<現職教員>	3年次11月	2時間
教職に関する講話(2)<学校現場の現代的課題>	講義<大学教員>	3年次11月	2時間
教職に関する講話(3)<安全及び救急看護について>	講義<大学教員>	3年次1月	2時間
教育関係施設における経験 嶺北特別支援学校、嶺南西特別支援学校 <特別支援学校での見学実習>	見学実習<現職教員、 大学教員>	3年次2月	6時間
教育実習実践指導<学習指導案作成・模擬授業>	講義・演習 <現職教員>	4年次4月	6時間
教育実習事前指導(1)<生徒とのかかわり>	講義<大学教員>	4年次4月	2時間
教育実習事前指導(2)<実習の実際的側面について>	講義<大学教員>	4年次4月	2時間
教育実習事前指導(3)<教育実習中の注意事項>	講義<大学教員>	4年次5月	2時間
教育実習事後指導 <ディスカッション等を通して実習経験を深め、 反省し、広げる>	演習<大学教員> 実習生による実習報告会で 反省と考察を行う。	4年次10月	4時間
計			30時間

8 教員及び助手の配置並びに巡回指導計画

実習中は本学の実習担当教員が巡回し、研究授業等を通じて指導を行う。移動にあたっては、自家用車または公共交通機関等、最も合理的な移動手段を用いる。

実習担当教員は、教育実習期間中も大学において講義を担当することもあるが、巡回が十分に可能な時間に設定する等、無理のない巡回指導計画となっている。

9 実習施設における指導者の配置計画

実習先の校長による全般的指導、監督のもと、長が任命する十分な資質・能力を有した実習指導教員が実際の指導にあたる。実習の達成目標等に向けた学生の指導については、本学の実習担当教員と事務

局が実習先の実習指導教員と打ち合わせを行う。

10 成績評価体制及び単位認定方法

教育実習成績報告票による評価を実習先の指導教員へ依頼する。実習の評価は、実習指導教員による評価内容をふまえ、実習先の校長が総合的に決定し、大学に通知する。それを踏まえて、本学の実習担当教員が事前・事後指導の評価等も含めて単位認定を行う。

(参考資料：⑱「教育実習成績報告票」)

第 7 企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画

1 恐竜発掘実習

専門応用科目の選択科目として設ける「恐竜発掘実習」では、3 年生以上を対象とし、語学力やグローバル・コミュニケーション力の向上、研究最前線の情報収集を目的として、海外で発掘調査実習を行う。

実習の概要は以下のとおりである。（予定）

国名	受入先・訪問先機関	期間・受入可能人数	実習内容
タイ王国	・シリントーン博物館 ・ピアン恐竜博物館 ・ナコンラチャシマ ラジャパット大学附属 コラート化石博物館	2 週間程度 ・ 各施設 30 人	・博物館見学 ・発掘調査 ・現地研究者や学生 との交流

(1) 実習先の確保及び実習の流れ

実習先については、タイを予定しており、指導教員が共同研究等を行っている機関を中心に選定し、各年度初めの学部ガイダンスにおいて、その機関で行われている研究の特徴等を分かりやすく説明するガイダンスを行う。参加人数により柔軟に対応できるプログラムを設定し、海外でのコミュニケーション能力・語学能力の向上、発掘調査に主眼を置いた実習を行うため、現地大学生との交流などを取り入れる。また、上記に加え、研究能力向上も目的とするため、現地大学院生や研究者との交流も視野に入れ、研究最前線の情報収集を行う。

なお、感染症等の拡大により、渡航が困難な場合は、現地の発掘現場の映像を投影し、オンラインで調査・観察を行うことや、VR 技術を利用したバーチャル巡検を実施するなど、代替の方法を検討している。

(2) 指導・サポート体制

海外実習について、本学指導教員を複数名派遣することで、安全管理をはじめ現地における学生指導を徹底する。また、本学教員が現地機関との間で実習内容に関する調整を行い、本学の責任において実習先の選定、実習プログラムの企画、実施、成績評価までの一連の作業を行う。なお、金銭的補助について、本学には海外留学派遣を支援するための制度があるため、学生に周知していく。

（参考資料：⑳「福井県立大学海外留学派遣制度補助金取扱要綱」）

(3) 事前・事後学修

海外実習を有意義なものとするために、事前指導・事後指導を実施する。指導教員が担当し、授業の一環として全般的な運営を行う。事前指導では、海外実習の準備学修として、訪問予定地、調査地の古生物・地質の事前学修、海外生活での注意点、危機管理等を指導する。また、文化交流の準備や、日本の文化、経済・社会事情を海外で伝える上でのポイントについても併せて指導する。

事後指導として、学生自身が体験した海外実習を振り返り、事前学修も含めたレポートをまとめ、今後の本学部での学修や将来のキャリアへのポジティブな反映に結びつくよう指導する。

(4) 成績評価及び単位認定方法

成績評価については、事前学修レポートや、実習中の質疑応答、実習終了時に提出するレポート、帰国後に行う実習の成果発表の内容をもとに判定した上で単位認定を行うこととする。

2 博物館実習

専門応用科目（選択科目）および学芸員養成課程における博物館に関する科目の一つとして設ける「博物館実習」では、4年次に、博物館の展示コンセプトや館内の施設設備等に加え、地学・古生物学の学芸員として必要な資料収集から保存・保管作業を説明できることを目的として、展示構成、収蔵標本の管理・保管・収集、研究活動、教育普及プログラムの構築など、多様な博物館業務を経験し、実践的スキルを身につける実習を行う。

実習は、勝山キャンパスが福井県立恐竜博物館と隣接している特徴を生かして原則として福井県立恐竜博物館で行う。また、指導や成績評価、単位認定については博物館と併任している学部教員が行う。

受入先	所在地	受入可能人数	実習内容
福井県立恐竜博物館	福井県勝山市村岡町寺尾 51-11	30 人	・ 博物館設備・標本の見学 ・ 調査研究活動 ・ 広報や教育普及活動の体験 等

第8 取得可能な資格

本学部では、所定単位取得の上、卒業要件を満たすことにより、以下の免許資格または受験資格等の取得が可能である。

資格名	国家・民間	卒業要件	取得区分
測量士補	国家	○	A
学芸員	国家	△	A
高等学校教諭一種免許状（理科）	国家	△	A

<卒業要件> 卒業要件で取得可能 ○ / 追加科目履修が必要 △

<取得区分>

- ・ 所定単位取得により、免許資格取得可能 A

第9 入学者選抜の概要

1 アドミッションポリシー

本学部では、アドミッションポリシーを次のとおり定める。

教育目的を達成するため、本学部は次のような学生の入学を求めている。

- ① 自然科学に興味を持ち、これに関する研究分野におけるフィールド活動に関心・意欲がある。
- ② 多様な自然界の現象に対して科学的探究心を持ち、課題解決に向けて自分の意見を表現できる。
- ③ 自然科学を学ぶ上での理科・数学および国際化・情報化社会に対応するための外国語・情報科学の基礎を身につけている。
- ④ 積極的かつ自主的な学習姿勢を持ち、他者との協働作業などを意欲的に取り組むことができる。

本学部では、入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価・判定する入試方法として一般選抜、学校推薦型選抜、総合型選抜、特別選抜を実施する。また、学力を構成している以下の重要な三つの要素を適切に把握するよう十分留意するとともに、入学後の教育との関連を十分踏まえた上で、高等学校等の学習指導要領にも配慮しながら実施する。

<学力を構成する三つの要素>

学力の三つの要素とアドミッションポリシー（AP）との関連性は、以下のとおりである。

1. 基礎的・基本的な知識・技能の修得：AP③
2. これらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力など：AP②
3. 主体性を持ち、多様な人々と協働して学ぶ態度：AP①、AP④

2 入試方法の区分と募集人員

(1) 入試方法の区分

「一般選抜」「学校推薦型選抜」、「総合型選抜」、「特別選抜」の区分で実施する。

(2) 募集人員

入学定員は30名とし、入学試験の区分毎の募集人員は、以下のとおりである。

入学定員	募集人員				
	一般選抜		学校推薦 型選抜	総合型選抜	特別選抜
	前期	後期			
30名	15名	3名	6名	6名 (うち地域枠2名)	若干名

3 選抜方法

アドミッションポリシーに基づき、入学志願者の「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性を持ち、多様な人々と協働して学ぶ態度」をそれぞれの選抜方法において判断していく。特に、一般選抜（前期・後期）では、主に知識や技能を重視して判定を行い、優れた人材の確保を目指す。学校推薦型選抜では、思考力・判断力・表現力および主体性・協働性の評価を重視し、さらに、総合型選抜で

は本人の熱意、能力、適性等を重視する。また、これら以外に、留学生や社会人等多様な人材を対象とした特別選抜を設ける。

各選抜方法の詳細は、以下のとおりである。

(1) 一般選抜（前期・後期）

一般選抜試験（前期・後期）は、学力の3要素のうち、特に、知識・技能を重視した選抜方法であり、前期日程・後期日程ともに、調査書、大学入学共通テストの成績および個別学力検査の成績を総合的に判定して選抜する。アドミッションポリシーにもあるとおり、理科や数学など自然科学を学ぶ上で必要となる科目はもちろんのこと、デジタル化や国際化に対応できるように情報や英語を必修とする。また、後期日程においては、面接試験を行う。

日程	大学入学共通テスト		個別学力検査	
	教科	科目	教科	科目
前期	国語	『国語』		
	数学	『数Ⅰ, 数A』および『数Ⅱ, 数B, 数C』(2科目)		
	理科	『物理』, 『化学』, 『生物』, 『地学』から2科目	理科	「化学基礎, 化学」, 「生物基礎, 生物」, 「地学基礎, 地学」から1科目
	外国語	『英 (IC プレイヤーを使用する試験を含む)』, 『独』, 『仏』, 『中』, 『韓』から1科目	英語	「英語コミュニケーションⅠ, 英語コミュニケーションⅡ, 英語コミュニケーションⅢ, 論理・表現Ⅰ, 論理・表現Ⅱ, 論理・表現Ⅲ」
	情報	『情報Ⅰ』		
			[5教科7科目]	[2教科]
後期	国語	『国語』	その他	「面接」
	数学	『数Ⅰ, 数A』および『数Ⅱ, 数B, 数C』(2科目)		
	理科	『物理基礎/化学基礎/生物基礎/地学基礎』, 『物理』, 『化学』, 『生物』, 『地学』から1科目		
	外国語	『英 (IC プレイヤーを使用する試験を含む)』, 『独』, 『仏』, 『中』, 『韓』から1科目		
	情報	『情報Ⅰ』		
			[5教科6科目]	[1教科]

(2) 学校推薦型選抜

学校推薦型選抜では、学力の3要素のうち、特に、思考力・判断力・表現力および主体性・協働性の評価を重視する選抜方法であり、高等学校により、本学の基本理念や教育目的を理解し、高い入学意欲を有していると判断され、学校長等の推薦を得た学生に対して、小論文、面接、調査書、自己推薦書の内容を総合して判定する。

福井県内の高校生を県内に定着させる観点から、学校推薦型選抜の出願資格は、本人または保護者が令和6年4月1日以前から引き続き福井県内に住所を有している者に限る。また、知識・技能を担保す

る観点から、調査書の英語、数学、情報および理科の学習成績の状況の平均が 4.0 以上であることを要する。

(3) 総合型選抜

総合型選抜は、学力の 3 要素のうち、特に、思考力・判断力・表現力および主体性・協働性の評価を重視する選抜方法であり、恐竜等の古生物や地質に強い関心があり、将来それらの分野で活躍しようという強い意志と希望を持つ学生を受け入れるため、本人の熱意、能力、適性等を重視した選抜を次のとおり行う。

入学者の選抜は、2 段階選抜により行う。

- ・第 1 次選抜

書類選考（自己推薦書、調査書）により、熱意と適性の評価を行う。

- ・第 2 次選抜

出願書類に基づいて、プレゼンテーションおよび面接の内容を総合して評価する。

なお、地域枠とは、恐竜を含む古生物学や地質学などの自然科学に強い関心があり、福井県内での就業や起業、地域経済の活性化に貢献しようとする意欲を持つ学生の確保を目的として、総合型選抜において福井県内の志願者を合格させる人数枠である。地域枠に出願できるのは、福井県内の者であり、地域枠への出願者については、一般枠（地域枠以外をいう）を併願したものとして取り扱う。

（注）福井県内の者とは、以下のいずれかに該当する者のことをいいます。

ア 令和 5 年 4 月 1 日以前から引き続き福井県内に住所を有する者

イ 令和 5 年 4 月 1 日以前から引き続き福井県内に 1 親等の親族が住所を有する者

(4) 留学生や社会人等を対象とした特別選抜について

その他、若干名ではあるが、留学生や社会人等を対象として特別選抜を行う。「中国引揚者等生徒特別選抜」、「帰国生徒特別選抜」、「社会人特別選抜」は、小論文、面接および出願書類を組み合わせた入試とする。なお、社会人とは満 23 歳に達しており、社会人の経歴を 3 年以上有する者を指し、既修得単位は教授会の意見を聴いて学長が認定する。また、「私費外国人留学生特別選抜」は、日本留学試験の成績、面接および出願書類の内容を総合して行う。留学生の、経費支弁能力の確認方法は誓約書の提出、在籍管理方法は身上調書の提出を通して行う。

4 各選抜方法と「学力の 3 要素」、「アドミッションポリシー」との関連性

各選抜方法と「学力の 3 要素」、「アドミッションポリシー」の関連性は下記の表のとおりである。

「選抜方法」と「学力の3要素」との関連性

		選抜方法		
		一般選抜 (前期・後期)	学校推薦型選抜	総合型選抜
学力の3要素	知識・技能	大学入学共通テスト 個別学力検査	小論文 面接 自己推薦書	自己推薦書
	思考力 判断力 表現力	大学入学共通テスト 個別学力検査	小論文 面接 自己推薦書	プレゼンテーション 面接
	主体性 協働性	調査書	調査書 面接	調査書 プレゼンテーション 面接

「選抜方法」と「アドミッションポリシー (AP)」との関連性

		選抜方法		
		一般選抜 (前期・後期)	学校推薦型選抜	総合型選抜
AP	①自然科学に興味を持ち、これに関する研究分野におけるフィールド活動に関心・意欲がある。	個別学力検査	小論文 面接 自己推薦書	自己推薦書 面接 プレゼンテーション
	②多様な自然界の現象に対して科学的探究心を持ち、課題解決に向けて自分の意見を表現できる。	個別学力検査	小論文 面接 自己推薦書	自己推薦書 面接 プレゼンテーション
	③自然科学を学ぶ上での理科・数学および国際化・情報化社会に対応するための外国語・情報科学の基礎を身につけている。	大学入学共通テスト 個別学力検査	調査書	調査書
	④積極的かつ自主的な学習姿勢を持ち、他者との協働作業などを意欲的に取り組むことができる。	調査書	調査書 面接	調査書 面接 プレゼンテーション

5 入学試験実施体制

本学では、入学者選抜試験は、副学長を本部長とする「入学試験本部会議」の管理の下に実施することとしており、入学者選抜試験が各段階において適切に実施される体制を整備する。

各年度の入試方針、入試合格者の決定、その他入試に関する重要事項については、入学試験本部会議で決定し、その結果を教育研究審議会に報告する体制で入試を運営する。入学者選抜の方法、大学入学共通テスト・個別学力検査等の実施出題教科・科目・配点等は事前に公表する。入試問題の作成は、「入

学試験本部会議」に設置された「出題・採点業務部会」委員が担当し、その内容を段階的に点検するための体制を整える。

本学部への合格者の判定は、入学試験結果に関して行われる本学部教授会において審議され、その結果に基づいて、合否判定会議で決定することとする。全学入試業務に関する事務は入試企画室が所掌する。

6 科目等履修生・聴講生

本学では、その基本理念として掲げられている「開かれた大学」を具体的に展開するために、科目等履修生や聴講生として学外からの社会人や市民の参加を歓迎している。科目等履修生と聴講生ともに、一般教育科目をはじめとした講義科目について可能な限り受け入れを行っている。受入実績について、科目等履修生は過去5年平均で約6人であり（H30：12人、R1：8人、R2：4人、R3：3人、R4：3人）、聴講生は過去5年平均で約41人である。（H30：94人、R1：110人、R2：0人、R3：2人、R4：1人）

本学学部の開設にあたっては、従来の「開かれた大学」を積極的に展開し、本学部生の学修に支障がない範囲で、科目等履修生や聴講生を可能な限り受け入れていく。

（参考資料：①「福井県立大学科目等履修生規程」、②「福井県立大学聴講生規程」）

第 10 教育研究実施組織等の編成の考え方及び特色

1 教員組織の編成の基本的な考え方

教員は、それぞれの教育・研究分野の教育実績、研究実績について、本学部における教育研究を担うにふさわしい基幹教員を配置する。具体的に、本学部において中心となる研究分野は、恐竜をはじめとした古生物学や地質学、古環境学、古気候学等の地球科学分野である。

また、福井県における長い研究の蓄積を生かし、本学部では、それをさらに発展させ地質学を含めた地球科学分野の教育・研究活動を通じ、現代社会の地球科学諸問題に対応するため、幅広い教養と地球科学に関する知識・技術を持ち、多様な局面において協働的および自主的に課題を探求・解決できる人材を育成するとともに、学術情報を地域社会へ積極的に開放することを目指す。ゆえに、必要な能力の修得を目指す各科目には、高い専門性を有する 20 人の基幹教員を配置する。

基幹教員は、古生物学や地質学、古環境学、古気候学等の学会に所属しており、他大学や教育研究機関との情報交換、最新の知識情報の入手など、相互に交流できる関係を持っている。また、福井県内では、県立恐竜博物館の研究者や県内新聞社と協働で設立した大学発ベンチャー企業の役員を務めるなど、県行政機関や産業界との密な協力関係を有する。したがって、それらの関係機関との協力関係を活かし、地域社会の課題を的確に分析することで、課題解決に向けた研究を推進できる。

加えて、基幹教員の多くは、全国の教育・研究機関での教育・研究経験や、海外（米国、アジア）での修学あるいは研究経験を有しており、現在も関係を維持していることから、国内外の幅広い人脈を国際的教育研究の達成にもつなげることができる。

2 教員配置（職位・学位・担当科目）

本学部は、「恐竜・地質学科」の 1 学科構成で、20 名の基幹教員で構成する。職位の内訳としては、教授 12 名、准教授 5 名、助教 3 名を配置し、全ての基幹教員において、博士の学位を有している。教員体制は、学部開設時の令和 7 年 4 月は 14 名の予定であり、令和 8 年 4 月に 6 名が着任して 20 名体制となる予定である。

また、20 名のうち、11 名は「恐竜・古生物コース」に配置し、残りの 9 名は「地質・古環境コース」に配置する。

なお、主要授業科目については、いずれも基幹教員を主な担当教員としている。

3 年齢構成

20 名の年齢構成について、完成年度（令和 10 年度）の令和 11 年 3 月 31 日時点において、70 歳以上が 3 名、65 歳以上が 2 名、60 歳～64 歳が 2 名、50 歳台が 5 名、40 歳台が 6 名、30 歳台が 2 名である。平均年齢は、53.4 歳であり、教員の年齢構成には特に偏りはなく、バランスの取れた配置になっており、教育水準の維持向上および教育研究の活性化が図れるものと考えている。

「公立大学法人福井県立大学職員就業規則」第 21 条第 1 項において、教員の定年は満 65 歳と定められており、この年齢を完成年度時点で超過する教員は 5 名である。しかし、同規則第 22 条の 2 において、教員の定年の特例が定められており、理事長の判断により、学部等の新設の際には、その完成年度に達するその者の年齢まで定年を延長できる。この特例に基づき、70 歳以上 3 名（教員 A、B、C）および 65 歳以上 1 名（教員 D）の計 4 名の定年をそれぞれ完成年度の年度終了時における年齢まで延長する。

また、65 歳以上 2 名のうち、残りの 1 名は特命教授として雇用する。これについては、「公立大学法人福井県立大学特命教員設置規程」第 6 条において定年年齢は 70 歳と定められている。

上記の5名とも雇用期間は完成年度までとし、各教員の専門分野に係る若手教員の採用手続きを行う。教員組織の将来構想について、専門分野や職位、年齢構成等のバランスを勘案して、教員組織の継続性および一貫性を保つよう努め、早期に計画的に実施する。

教員の採用計画は、以下のとおりである。なお、大学設置基準に抵触しないよう、令和14、15年度に選考を行う教員については、教授を採用する。

採用選考年度	採用予定人数	年 齢	役 職	着任予定年度
令和10年度	5名	30～40歳代	准教授、助教	令和11年度
令和14年度	1名	40～50歳代	教授	令和15年度
令和15年度	1名	40～50歳代	教授	令和16年度

また、引継ぎについては、情報連携を密に図るとともに、マニュアルの作成等を通して、学部組織として教育の質を維持する体制にする。

(参考資料：㉓「公立大学法人福井県立大学職員就業規則」、㉔「公立大学法人福井県立大学特命教員設置規程」)

4 教育研究実施組織等について

大学においては、授業による教育だけでなく、進路選択や心身の健康に関する支援等の厚生補導を合わせた総合的な支援を行う必要がある。そこで、本学においては、学生が進路選択や心身の健康について悩んでいる場合や相談を希望する場合は、附属施設であるキャリアセンターや保健管理センターにおいて学生のケアを行う体制を構築している。また、研究費等の申請や執行の際には、教員だけでなく、職員も書類の確認を行う体制を構築しているなど教職協働で大学運営を行っている。

第11 研究の実施についての考え方、体制、取組

近年、大学の研究成果で生み出された知的財産の活用や研究の国際化に伴う安全保障管理、研究財源の多様化に伴う、様々な機関との共同研究など、専門的な業務が増加している。また、研究者一人で行う研究から、様々な分野の研究者が連携して行う共同研究など、研究の進め方自体も大きく変化している。このような中で、大学の研究成果の効果的な社会還元や、外部資金獲得の促進など、戦略的に大学を経営・運営していくために、本学では、令和6年度より研究推進支援の高度専門職であるリサーチ・アドミニストレーター(URA)を配置する予定である。URAは、研究資金獲得や研究活動のマネジメント、産学連携、成果の活用促進などを行って、研究者の研究活動の活発化や研究開発マネジメントの強化を図る業務に従事する予定である。

第12 施設、設備等の整備計画

1 校地、運動場の整備計画

本学は、メインキャンパスである「永平寺キャンパス」に経済学部、生物資源学部生物資源学科および看護福祉学部、「小浜キャンパス」に海洋生物資源学部海洋生物資源学科、「あわらキャンパス」に生物資源学部創造農学科、「かつみキャンパス」に海洋生物資源学部先端増養殖科学科の拠点を設置している。さらに、県立恐竜博物館の隣接地に本学部の拠点となる「勝山キャンパス」の設置を計画している。

本学部の学生は、1年次には永平寺キャンパスで一般教育科目を中心とした学修や課外活動等を行う。永平寺キャンパスは、福井県永平寺町に位置し校地面積は199903.92㎡と広大で緑豊かな環境であり、教育・研究を行うに相応しい環境であると言える。経済学部棟、生物資源学部棟、看護福祉学部棟のほか、事務局のある本部棟、図書館、食堂、学生会館等の厚生施設、体育館(2596㎡)等の建物や運動場(20370㎡)、野球場(10400㎡)、テニスコート6面等を有する。学生や教職員等の交流・休息スペースとして、談話室・ホールを備えた学生会館や食堂のほか、学内各所に相当数のベンチを配置して学生の利用に備えており、また、キャンパスの中央には「フォーラム」と呼ぶ芝生の広場もあり、テーブルやベンチも設置された憩いの場となっている。

専門教育科目が中心となる2年次以降は、勝山キャンパスにおいて教育・研究、課外活動等を行う。勝山キャンパスは、福井県勝山市の長尾山総合公園内に位置し、勝山市から校地(7567.39㎡)の無償貸与を受け、本学がキャンパスを整備する。勝山市は「恐竜渓谷ふくい勝山」としてジオパークの認定を受けており、勝山キャンパスが県立恐竜博物館の近傍に設置されることで、恐竜博物館と教育・研究面で密接な連携が可能となり、本学部の教育研究環境としてふさわしいと言える。学部棟1階に設ける「学生ホール」は、2階、3階とつながる大きな吹抜けとなっており、自習室としての機能に加え、学生同士の交流や休憩ができる空間となっている。また、山並みや市街地が望める学部棟南側に「ラボパーク」(屋外広場)を設け、屋外講義や屋外ワークショップなど、屋外アクティビティとつながる実践的な学びの場とともに学生同士の交流や休憩ができる場となっている。

(参考資料：㉔「勝山キャンパス位置図および平面図」)

2 校舎等施設の整備計画

本学部においては、永平寺キャンパスと勝山キャンパスの2拠点での教育を実施する。1年次に永平寺キャンパスにおいて一般教育科目・専門教育科目(専門基礎科目)の授業を行うが、他学部と共用する共通講義棟については、時間割の調整により使用可能であり、教室確保について特段の支障は生じない。2年次から勝山キャンパスにおいて、専門教育科目(専門基礎科目、専門応用科目)の授業を行うが、学生移動の利便を考え、カリキュラム上の配慮を行っている。

(参考資料：㉕「時間割(案)」)

本学部の専用施設となる勝山キャンパスは、2年次の利用が始まる令和8年度に間に合うよう令和7年12月の完成を目指し新築工事を進める計画としている。教室は、本学部における科目の配置状況やその授業形態、受講者数等を踏まえた上で必要な数および規模の教室を確保する。校舎各室等の状況は次のとおりであり、校舎各階の平面図は資料㉔のとおりである。

(【再掲】参考資料：㉔「勝山キャンパス位置図および平面図」)

(1) 講義室・演習室

講義や試験を行う講義室(40名収容・約78㎡)を2室設ける。学生の自主的な学習や卒業論文等の執

筆に集中して取り組めるよう学生研究室を4年生用（50名収容・約136㎡）と院生用（35名収容・約135㎡）それぞれ整備する。また、デジタルデータの解析等を実施するため、情報処理演習室（36名収容・約93㎡）を設ける。

(2) 実験室・実習室

実験・実習を行う実験室（40名収容・約120㎡）を2室設ける。本学部が取り組む恐竜・古生物分野、地質・古環境分野、デジタル科学分野の教育・研究が実施できるよう各種実験・実習室を整備する。大型CT室、古生物比較解剖室、地学標本製作室、岩石研磨・加工室、ドラフト室、地質調査室、薄片製作室、XRF分析室、岩石粉碎処理室、研究用標本室、教育展示室を設ける。

(3) 教員研究室

教員が研究に専念し研究や授業準備等を行うため、教員研究室（約26㎡）を19室、非常勤講師控室（約26㎡）を1室整備する。なお、全ての部屋は個室とし、研究や授業準備に専念できるほか、学生の教育上の情報管理等においてもプライバシーが確保されるよう配慮している。

なお、各研究室に必要な机や椅子、書棚、電話、パソコン等を設置し教育研究環境を整える。

(4) 学生控室

恐竜の骨格をイメージし各階がつながる大きな吹抜けの空間を学生休憩室兼自習室として学生ホールを設け、学生の授業時間以外の休養スペースや居場所としての役割を果たす。また、多目的に使用可能な打ち合わせスペース（約20㎡）を3部屋確保し、グループ学習やプレゼンテーション、自主学习等フレキシブルな使用を可能な空間とする。

(5) 図書室・医務室

図書を保管・閲覧を行うための図書室や、学生等の心身の不調時に休養や相談を行うための医務室・学生相談室を整備する。

(6) その他厚生補導施設等

学部長室（約24㎡）、会議室、事務室、サークル部屋を2室、学生更衣室兼シャワー室を2室、整備する。

各室には、以下の実験機器・器具等を配備する。

なお、扱い方を誤ると危険が伴うものもあるため、使用しない際には必ず各室を施錠し、使用時には扱いに慣れた教員を配置し、安全に十分配慮する。

・情報処理演習室：

ミニタワー型PC、画像処理ソフト等

・実験室：

実体顕微鏡、偏光顕微鏡、LED照明拡大顕微鏡、顕微鏡ライト、電磁式ふるい振とう機等

・大型CT室

X線CT装置、レーザースキャナ、ドローン等

- ・古生物比較解剖室
ヒュームフード、大型冷凍庫、解剖台、排気解剖台用器材等
- ・岩石研磨・加工室
サーボカット、ジオカット、ジオフォーム、フォーシポル、フォーシマット、偏光顕微鏡等
- ・ドラフト室
集塵機、エアツール、エアタンク、コンプレッサー、システム実体顕微鏡等
- ・地質調査室
安定同位体比質量分析装置、ガスクロマトグラフィー、X線回折装置、偏光顕微鏡、実体顕微鏡等
- ・薄片製作室：
ヒュームフード、排ガス処理装置、超音波洗浄機、ロータリーエバポレーター、恒温攪拌装置、純水製造装置、マッフル炉等
- ・XRF分析室：
クリーンベンチ、超純水製造装置、サーマルサイクラー、超低温冷凍庫、補助冷却装置、インキュベーター、滅菌器等
- ・岩石粉碎処理室：
蛍光X線顕微鏡、紫外可視分光光度計等

3 図書等の資料及び図書館の整備計画

図書館については、福井県立大学の永平寺キャンパスと小浜キャンパスの図書館相互利用システムが完備されており、永平寺キャンパスにある図書館では蔵書約37万冊、学術雑誌5584種、電子ジャーナル4455種と、小浜キャンパスにある図書館の蔵書約4.6万冊、学術雑誌250種、電子ジャーナル12種を合わせて利用することができる。両図書館の蔵書は全てデータ・ベース化されており、電子ジャーナル・データベースに関しては学内のネットワークを通して図書館ホームページから自由に検索・閲覧することができる環境を提供している。本学の図書館に必要な資料がない場合は、相互利用サービスを利用して他の図書館から図書や雑誌のコピーを取り寄せることを可能にしている。

永平寺キャンパスにある図書館の書架は全て開架方式となっており、学生は自由に図書や雑誌、視聴覚資料等を閲覧できる。閲覧席は約228席あり、個人で利用できるキャレルも5室完備している。館内貸出用ノートパソコンも10台用意している。

勝山キャンパスの図書室には、両図書館と同様に、図書館相互利用システムを導入するとともに、開架方式の書架を設置し、閲覧席を2席、館内貸出用ノートパソコンを1台整備する予定である。

本学部として完成年度までに一般教養図書をはじめ、古生物学や地質学、古環境学を中心として図書2060冊（うち、外国書430冊）や、これらの分野に関連する学術雑誌等を順次計画的に整備し、本学部の学修に資する。

(参考資料：⑳「図書目録（抜粋）」、㉑「電子図書目録（抜粋）」、㉒「学術雑誌名（抜粋）」)

第 13 2 以上の校地において教育研究を行う場合の具体的計画

本学部は、永平寺町に設置する永平寺キャンパスおよび勝山市に設置する勝山キャンパスの2つの校地を活用して教育を行う。学生は、原則として、一般教育科目を主に受講する1年次は永平寺キャンパスで教育を受け、専門教育科目が主になる2年次以降は勝山キャンパスを利用する。収容定員は、永平寺キャンパスは30人（入学定員30人×1年間）、勝山キャンパスは90人（入学定員30人×3年間）である。

【再掲】参考資料：㉔「時間割（案）」

1 基幹教員の配置

本学部の基幹教員20名のうち、19名は勝山キャンパスに配置する。残りの1名は、永平寺キャンパスに配置する。なお、本学部の基幹教員以外で一般教育科目を担当する教員については、永平寺キャンパスを中心に配置する。これらの教員同士は、学内会議における情報共有等を通して、有機・総合的に教育・研究が実施できるようにする。

2 教員の移動への配慮

本学部の基幹教員がキャンパス間を移動するケースは次の2つが想定される。1つ目は、恐竜学部の教員が一般教育科目および1年次開講の専門教育科目の授業を行うために、永平寺キャンパスへ移動するケースである。2つ目は、本学部の基幹教員のうち、永平寺キャンパスに配置される1名が勝山キャンパスに移動するケースである。永平寺キャンパスに配置の教員はおおよそ2日/週を勝山キャンパスで勤務し、本学部の担当授業科目（デジタル古生物学概論、デジタル古生物学研究法実習、古生物学実習Ⅱ等）の教育、教授会等管理運営への参画、オフィスアワーの設定等を行う。

キャンパス間を移動する場合、勝山キャンパスと永平寺キャンパス間の距離は約25kmであるが、公共交通機関（バス・鉄道）または自動車での移動が可能である。公共交通機関の場合の所要時間は、バスと電車を利用して約1時間15分、自動車の場合は約40分である。キャンパス間での移動の可能性がある教員については、主に自動車での移動であるため、授業と授業の間を1コマ空けたり、昼休みを挟んだりするなどして配慮を行う。また、本学では、コロナ禍を機にテレビ会議システムやZoom、Google Classroom等を利用したオンライン会議や授業が行われているため、適宜活用していく。

3 学生への配慮

学生は、2年次以降において一般教育科目を再履修するためにはキャンパス間を移動する必要がある。この場合に、次の授業まで1コマ空けたり、昼休みを挟む時間割が組めたりできるよう時間割の科目の配置に配慮する。

4 施設設備等の配慮

各キャンパスに教育研究や学生の福利厚生に必要な図書館、医務室、学生相談室、事務室などを整備している。教学情報へのアクセス、図書の貸し出し・返却などはキャンパスを超えて行えるよう横断的なネットワークが構築されている。学生に関する各種証明書の発行手続き等を、両キャンパスで行うことが可能である。

第14 管理運営

1 目的

本学は、教育および運営の最高責任者である学長のもとに、教学組織の意思決定機関である教育研究審議会を置いている。教育研究審議会の構成員は、学長、副学長、事務局長、学長が定める教育研究上の重要な組織の長、教育研究審議会が定めるところにより学長が指名する職員である。

教育研究審議会は、「中期目標について知事に対し述べる意見および年度計画に関する事項のうち、大学の教育研究に関するもの」「法により知事の認可または承認を受けなければならない事項のうち、大学の教育研究に関するもの」「重要な規程の制定または改廃に関する事項のうち、大学の教育研究に関するもの」「教育課程の編成に関する方針に係る事項」「学生の円滑な修学等を支援するために必要な助言、指導その他の援助に関する事項」「学生の入学、卒業または課程の修了その他学生の在籍に関する方針および学位の授与に関する方針に係る事項」「教員の人事および評価に関する事項」「研究費の配分に関する事項」「教育および研究の状況について自ら行う点検および評価に関する事項」等、本学の教育研究に関する重要事項について審議する。

(参考資料：⑩「公立大学法人福井県立大学教育研究審議会規程」)

また、教育研究審議会の方針に基づき、大学の教育および研究の推進並びに学生および就職の支援等に関し、協議検討および調整を行うため、以下の委員会を置く。

※若干名とは、1名以上を指す。

種類	事項	委員
教育研究委員会	教育および研究の推進に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・教育研究審議会委員 若干名 ・学生部長 ・各学部、学術教養センターおよび附置研究所に所属し、教育および研究に知見を有する教員 若干名 ・事務局職員 若干名
学生支援委員会	学生および就職の支援に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・教育研究審議会委員 若干名 ・学生部長 ・各学科、学術教養センターおよびキャリアセンターに所属し、学生支援およびキャリア教育に知見を有する教員 若干名 ・事務局職員 若干名
大学院委員会	大学院の運営に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・各研究科長 ・各専攻（各研究科長の属する専攻を除く。）の教員 若干名
入試制度検討委員会	入学試験制度に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・各学科および学術教養センターに所属し、入学試験制度に知見を有する教員 若干名 ・教育・学生支援部長
情報教育・DX委員会	情報教育、教務・学生支援および大学運営のデジタル化に関すること	<ul style="list-style-type: none"> ・情報センターに所属する教員および事務局職員

		<ul style="list-style-type: none"> ・各学部、学術教養センターおよび附置研究所に所属し、デジタル化に知見を有する教員 若干名 ・事務局職員 若干名
--	--	--

2 本学部の組織

本学部には学部長を置く。学部長は、学部に関する事項を掌理する。

3 恐竜学部教授会

ア 組織

本学部の管理運営は、恐竜学部教授会が管理する。恐竜学部教授会は、学部長および学部にも所属する基幹教員（教授に限らない）をもって組織する。恐竜学部教授会は、学部長が招集し主宰する。定例会議は原則として毎月1回開催するが、必要に応じて臨時会議を開催することができる。

イ 審議事項

- (1) 学部における学生の入学、卒業に関する事項
 - (2) 学部における学位の授与に関する事項
 - (3) 学部における教育課程の編成に関する事項
 - (4) 学部における学生の成績の管理に関する事項
 - (5) 学部における学生の身分に関する事項（休学、復学、除籍）
 - (6) 学部における学生の厚生、補導および賞罰に関する事項
 - (7) その他学部における教育研究に関する重要な事項
- （参考資料：㊸「公立大学法人福井県立大学教授会規程」）

第15 自己点検・評価

1 実施体制・実施方法

2007（平成19）年度の法人化以降、地方独立行政法人法の規定により、6年間を見据えた中期計画を策定し、実施してきた。

また、この中期計画を具体化するため、年度計画として定めた教育研究、業務運営、財務などの取り組みや、中期計画の進捗状況については、毎年、自己点検・評価を行うとともに、業務実績報告書として取りまとめ、理事会、経営審議会および教育研究審議会での審議を経て、公立大学法人福井県立大学評価委員会による外部審査を受けている。

なお、評価委員会で意見等が付された事項については、教育研究審議会での対応方針を協議し、改善への取り組みを行っている。

また、学校教育法に基づく第三者認証評価機関（本学は「公益財団法人大学基準協会」）による外部評価を受審することとしており、中期計画の進捗度とも合わせて、本学の状況を総括的に自己点検・評価する機会としている。

2 結果の活用・公表

本学の自己点検・評価結果は、大学のホームページ上に情報公開し、学内・学外からアクセスできるようにしている。

第16 情報の公表

本学部の諸活動について広く説明する責務を全うし、開かれた大学運営を推進するために、保有する情報の公開を行う。この趣旨に則り、本学部に関する情報、教員情報、教員の教育・研究活動、地域貢献活動について学外に向けて積極的な情報公開を行う。一般的な情報は、大学ホームページ、大学案内等を通して公開するとともに、個別の要請に対応し情報を提供する。

1 情報提供の方法

以下の(1)～(10)の各項目について、以下のとおり、大学のホームページにおいて公表している。本学部に関する情報についても、ページを整備しているが、随時追加し、各種情報を積極的に発信する。

2 情報提供の内容及びホームページアドレス

大学ホームページ (<https://www.fpu.ac.jp/>)

- (1) 教育研究上の目的及び3つのポリシーに関すること
<https://www.fpu.ac.jp/about/goal.html>
- (2) 教育研究上の基本組織に関すること
<https://www.fpu.ac.jp/about/organizational.html>
- (3) 教育研究実施組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること
<https://www.fpu.ac.jp/about/staff.html>
https://www.fpu.ac.jp/faculty_members/index.html
- (4) 入学者に関する受入れ方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること
<https://www.fpu.ac.jp/admission/d152476.html>
https://www.fpu.ac.jp/career/students/job_results.html
- (5) 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること
<https://www.fpu.ac.jp/news/schedule.html>
<https://svc3.jim.fpu.ac.jp/campusweb/slbsrch.do>
- (6) 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること
<https://www.fpu.ac.jp/about/classes.html>
<https://www.fpu.ac.jp/about/graduate.html>
- (7) 校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること
https://www.fpu.ac.jp/campus_life/prospective_students/campus_map.html
https://www.fpu.ac.jp/campus_life/prospective_students/clubs.html
- (8) 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること
https://www.fpu.ac.jp/campus_life/students/tuition.html
https://www.fpu.ac.jp/campus_life/prospective_students/tuition.html
- (9) 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること
https://www.fpu.ac.jp/campus_life/index.html
https://www.fpu.ac.jp/career_center/career_center/use.html
- (10) その他（教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報、学則等各種規程、設置認可申請書、設置届出書、設置計画履行状況等報告書、自己点検・評価報告書、認証評価の

結果等)

<https://www.fpu.ac.jp/about/goal.html>

<https://www.fpu.ac.jp/about/d154739.html>

<https://www.fpu.ac.jp/about/application.html>

<https://www.fpu.ac.jp/about/d152308.html>

(11) 大学院設置基準第 14 条の 2 第 2 項に規定する学位論文に係る評価に当たっての基準

<https://www.fpu.ac.jp/students/d154794.html>

第17 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等

1 FDの取組

本学では、教育および研究の推進に関することを目的として設置する教育研究委員会に、FD (Faculty Development) 部会を設け、個々の教員の授業内容や方法の改善および向上のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修の取組を実施している。具体的な取組は、以下のとおりである。

(参考資料：⑳「福井県立大学教育研究委員会FD部会要領」)

(1) 学生による授業評価

授業評価は、教員が講義の質的向上を目指すために実施すると同時に、学生にとっても、授業に取り組む姿勢を自己評価することで、真摯に学問と向き合うことに役立っている。評価では、授業に関する総合的な満足度のほか、各学生はシラバスに記載された到達目標の達成度や、達成度が低い場合にはその理由もマークし、自らの学修活動についての振り返りを行う。当該授業から受けた知的刺激の程度については4段階で評価し、授業の改善点や教室設備・授業環境については要望を自由に記載することが可能である。

学生による授業評価をもとに科目担当教員は、振り返りと次回に向けた改善点を検討し学部長、研究科長に提出、学部長、研究科長は年度ごとにその総括を行い各教員にフィードバックしている。

また、結果については、毎年度「ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」として公開している。

(参考資料：㉑「ファカルティ・ディベロップメント報告書2022」)

(2) 研修

本学では、授業内容・方法を改善し向上させるために、FD研修を行っている。近年、新型コロナウイルスの影響により、全学的な研修は行っていないが、学部ごとに研修会を行っており、その結果を上記の「ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」に掲載している。

また、TAについては、授業科目担当教員があらかじめ個別に補助用務に関する指導を行っているが、今後は全学的な研修にも参加するように促していく。

(3) 教学IR (Institutional Research)

FD部会内に、教学IR作業グループを設置し、教育、学習および学生生活に関する学生の各種データを用いて分析・提言を行うことにより、現状把握および将来予測を行い、もって大学における教学改善を目指すことができる体制を整えている。

(参考資料：㉒「FD部会 教学IR作業グループ運営要領」)

2 SDの取組

本学では、学生が能動的な学修者として入学目標を達成できるよう、教員と異なる立場・役割として職員が導くことを期待されていることから、SD (Staff Development) を実施している。

具体的には、年に2回程度、全ての教員・職員を集めて「全学ミーティング」を開催し、大学を取り巻く社会環境の変化と大学の現状に関する情報共有や、教育・研究・地域貢献・大学運営の区分ごとの諸課題と今後の対応策に関する研修を実施している。

また、研究資金獲得、情報セキュリティ、ハラスメント防止に関する研修を個別に実施するととも

に、公立大学協会が開催する各種研修への参加を教職員に促している。

3 その他の取組

(1) 教職員の倫理保持

大学が組織として、適切に教育研究活動や運営を行っていくためには、教職員の倫理の保持が不可欠である。本学では、教職員の職務に係る倫理の保持に関して、職務の公正さに対する社会からの疑念や不信を招くような行為の防止を図り、本学の業務に対する社会からの信頼を確保するため、「公立大学法人福井県立大学職員倫理規程」で倫理行動基準を定めるなど必要な対応を行っている。

また、科学研究費補助金等の公的な競争資金等のもとより、学内の研究費についても、その執行上の不正が研究活動全体に及ぼすとともに、本学の社会的信用を失墜させる重大な問題であることに鑑み、「公立大学法人福井県立大学研究費の不正使用防止に関する取扱規程」を定め、適正な研究活動に資するとともに不正の防止等に努めている。

(参考資料：⑳「公立大学法人福井県立大学職員倫理規程」、㉑「公立大学法人福井県立大学研究費の不正使用防止に関する取扱規程」)

(2) 教員評価

教育研究活動の向上に向けては、業務の状況について教員相互の間の情報の共有を図るとともに、教員および学部等による業務の自主的な改善を促進することが重要である。教員は、毎事業年度、その業務の実績を記載した業務実績報告書を学部に設置される教員評価委員会に提出する。委員会では、報告書および評価基準に基づき各教員の評価を行い、その結果を各教員に通知するとともに、学長に提出する。各教員に評価結果をフィードバックすることで、各教員はその結果を教育研究活動に活かしている。

また、評価結果は、勤勉手当の支給等に活用されている。

(参考資料：㉒「公立大学法人福井県立大学教員評価規程」)

第 18 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

1 教育課程内の取り組み

1年次には、一般教育科目「キャリア形成論」の受講を促し、職業理解および自己理解を深め自身の目指すキャリアデザインを考えさせる。

2、3年次には、地質学・古環境学の授業科目の中で、地質調査や土木、建設などインフラ整備に重要な役割を果たす職業との関連に触れ、学んだことを活かす職業への意識を高めさせる。

加えて、専門基礎科目の必修科目「地球科学フィールド実習Ⅰ」や「地質調査法実習Ⅰ」等、フィールドワークを行う授業科目を通じ、社会生活で必要となる他者との連携やチームワークについて学び、身につけさせる。

こうした課程を通じ、社会的に自立できる人材の育成につなげていく。

2 教育課程外の取り組み

サークル活動や地域活動等を通じて、興味、関心のある分野の知識を身につけることで、自分の夢の実現に向かって幅広い能力を身につけるとともに、自分とは異なる興味や専門分野、価値観を持つ他者との交流を通じて社会性を涵養できるよう、支援する。

学生への情報提供ツールとしては、キャリアセンターホームページ上に専用サイト「つぐみナビ」を整備している。当サイトにより、システム上で全国からの求人情報やインターンシップ情報の検索、キャリアセンターアドバイザーとの面談予約、先輩の就活体験報告の閲覧、学内就職支援行事等への参加申込等を行うことが可能である。

就職活動支援としては、キャリアセンターに民間企業を経験した就職アドバイザーが常駐し、エントリーシートの記入方法や面接試験を想定した実践的な指導等、様々な相談に対応するとともに、ガイダンスを定期的で開催するほか、公務員試験対策講座の開講、県内外の企業による合同説明会や個別企業説明会の実施を行っている。

また、本学では、学生のインターンシップへの参加を推進している。インターンシップは、大学での学びと社会での経験を結び付け、学生の学びの深化や学習意欲の喚起、自己の職業適性や将来設計について考える機会とすることを目的としている。広く一般に募集を行っている大企業等だけでなく、本学が位置する福井県の事業所にて就業体験ができる機会を設定し、学生からは普段目につきにくい企業の情報に触れる機会を設け、将来設計について考えるための多種多様な機会を提供していく。

3 適切な体制の整備

キャリア教育や個別の就職相談・指導など学生の就職活動を総合的に支援する組織として、「キャリアセンター」を設置している。専従の教員のほか、キャリアコンサルタント等の資格を有する就職アドバイザーを配置し、個別の相談や指導、面接練習などが実施できる体制としている。また、就職の支援に関する委員会として、各学科、学術教養センターおよびキャリアセンターに所属し、学生支援およびキャリア教育に知見を有する教員と、事務局の職員で構成した「学生支援委員会」を設置し、概ね毎月（年 11～12 回）開催している。学生の学問・就職に関する高い意識付けの実現や一人ひとりに合ったサポート方策等について検討している。